

学校支援ボランティアへの参加の実態および意識に関する調査研究報告書

宇都宮大学生涯学習教育研究センター
研究生 手塚 孝一

目 次

I 章 調査の概要

1 節 調査目的および調査内容

2 節 調査方法

II 章 調査結果の概要

1 節 回答者の基本的属性

2 節 学校支援ボランティア経験の有無と

おこなった動機

3 節 学校支援ボランティア経験のない理由と

今後の意向

4 節 学校支援ボランティアの活動分野

5 節 学校支援ボランティア経験による自己の変容

6 節 学校支援ボランティアの今後の意向

7 節 回答者の子ども時代の学校生活に対する意識

III 章 まとめ

1 節 調査結果の要約

付録 アンケート調査票

I 章 調査の概要

1 節 調査目的および調査内容

(1) 調査名

本調査は、以下のように表題を付して行ったものである。

学校支援ボランティアへの参加の実態
および意識に関する調査

(2) 調査目的

保護者や祖父母による学校支援ボランティアの実態および、小学校時代における学校生活の意識について調査する。調査結果について集計分析を行い、学校支援ボランティアを核とした地域の活性化および、平成20年度より始まる学校支援事業本部（仮称）設立に向けた学校のあり方を検討する。また、「小学校時代に

おける学校生活の意識の違いが、将来の学校への関わりに影響を及ぼす。」という仮説が妥当か否かを検証する。

(3) テーマ設定の意図

昨年学校支援ボランティアを招き、6年生の社会科「室町時代の文化」の学習で茶道教室を実施した。それは、自分の知らなかった、礼儀作法から心配りに至るまでの日本の伝統文化を知るよい機会であった。また、地域の教育力が子どもたちのために生かされたと感じる瞬間でもあった。地域に眠る教育力を子どもたちのために生かすことができたらどんなに素晴らしいことかと考えると、学校支援ボランティアを受け入れる必要性を感じずにはいられない。

昨今、社会の変化や地域における人間関係の希薄化等により家庭や地域の教育力の低下が指摘されている。そのような中、国や県でも「学校・家庭・地域社会」の連携強化を図りながら地域の教育力の向上に向けた施策が展開されている。その一つ、「学校支援事業本部（仮称）」設立により、学校は地域の核としての役割を担うことになる。そして、ますます学校は、地域に目を向け「開かれた学校」を実践していくものとする。つまり、「開かれた学校」を推進するにあたり、学校支援ボランティアは不可欠な条件なのである。

そこで私は、「『学校が好き』と言える子どもたちは、将来保護者集団（ここでは、父親・母親・祖父・祖母を保護者集団と定義する）となった時に、PTA活動のみならず、学校支援ボランティアとして学校に関わりを持つ人になるのではないかと。さらには、学校支援ボランティアを通して、地域活性化の原動力となるのではないかと。しいては、学校・家庭・地域の教育力の向上に寄与する人材となりうるのではないかと考えたのである。

上記の仮説を、アンケート調査を通して、保護者集団による学校支援ボランティアへの参加の実態を分析しながら検証していきたい。さらには、「学校が好き」といえる子を育てるための要因を明らかにし、今後の教育活動の一つの方策にしたいと考えている。

(4) 調査対象者

調査対象者は、私が現在勤務している栃木県矢板市立西小学校の全世帯（72 世帯）の父親、母親、祖父、祖母である。

(5) 調査項目

調査開始時に指定した調査項目は以下のとおりである。

- 回答者の基本的属性（子に対する続柄と年齢）
- 保護者と祖父母の学校支援ボランティア経験の有無
- 保護者と祖父母の学校支援ボランティアを行おうとした動機と行わない理由
- 保護者と祖父母の学校支援ボランティア経験による自分への影響や自己の変容
- 保護者と祖父母の学校支援ボランティアの分野と今後行いたい分野
- 保護者と祖父母の学校支援ボランティア実施上の課題
- 保護者と祖父母の小学校時代の学校生活に対する意識
- 学校・家庭・地域が連携を強めるために必要と考えている方策

(6) 調査実施主体

本調査は、手塚孝一（宇都宮大学生涯学習研究センター研究生）が、半年（平成19年10月～平成20年3月）にわたる内地留学の研修の一環として行ったものである。なお、本調査のアンケート調査票の枠組み、報告書の記述形式、分析の視点などに関しては、宇都宮大学生涯学習研究センター佐々木英和准教授の指導を受けた。また、平成18年度宇都宮大学生涯学習教育研究センター研究生であった、那須塩原市立共英小学校吉田正道教諭、宇都宮市立陽光小学校竹村耕生教諭の報告書を参考にさせていただいた。

2 節 調査方法

(1) 調査方法

調査は、アンケート調査に自記式で回答してもらう形により行った。

(2) 調査の実施時期

アンケート調査実施期間として、「2008年1月30日～2008年2月5日」の計7日間を設定し、

この期間内に学校の各担任の教員に提出するという方法で回収した。

この報告書の見方

- 1 調査結果について、原則として人数については整数（～人）、割合については百分比（～%）で表した。
- 2 割合についての値はすべて小数第2位を四捨五入し、小数第1位まで示している。なお、四捨五入の結果、個々の比率の合計と全体を表す数値とが一致しない場合がある。
- 3 原則として、本文中の数表・グラフの中では、「無効回答」および「無回答」の人数や割合については省略した。そのため、人数および比率について、個々の数字を合計しても全体の合計と一致しない場合がある。なお、ここでいう「無回答」とは、調査票の設計上、その問いに対して回答する資格があるにもかかわらず回答していないものを指す。また、「無効回答」とは、調査票の設計上その問いに対して回答する資格がないにもかかわらず、回答しているものを指す。

II 章 調査結果の概要

1 節 回答者の基本的属性

(1) 回答者の子に対する続柄

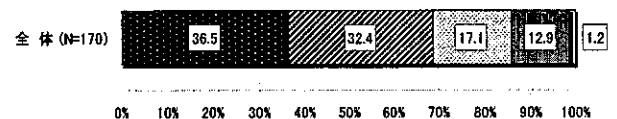
今回の調査では、1世帯で父親、母親、祖父、祖母など複数回答してくれることを想定し、家庭の実情にあわせて最大4枚、調査票をセットにして配布した。各世帯の家族構成（祖父や祖母が同居しているかどうかなど）を調べた上で配布したので、総配布部数は、72世帯に対し220枚となる。

回収は、176部あったので、数字上では8割の回収率であった。有効回答は170部であった。

【グラフ1-1-1】

A. あなたは以下のどれに該当しますか

■ 母親 □ 父親 □ 祖母 ■ 祖父 □ その他

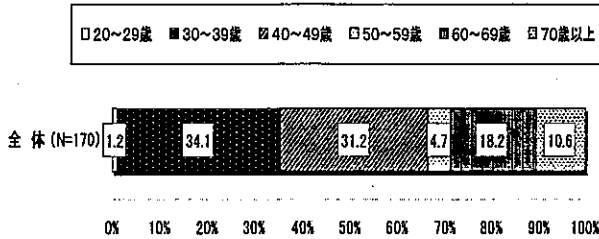


【グラフ1-1-1】は回答者の子に対する続柄を表すものである。当然ながら、母親と父親の数が多いが母親の方が父親に比べて約4ポイント（7人）多く回答して

いる。母親と父親を合わせると全体の約7割となる。また、祖父と祖母を合わせると51人(30.0%)になり、無視できない数となった。なお、それぞれの具体的な人数については、【表1-2-2】に示したとおりである。

【グラフ1-2-1】

B. あなたの現在の年齢は、以下のどれに該当しますか



【グラフ1-2-1】は、回答者の年齢を集計し年齢別にその割合を示したものである。年齢別で見ると、小学生の保護者が中心なので必然的に30代と40代に集中した。30代の回答者は58人で全体の34.1%にあたり、続いて多いのが40代で53人いた。これは全体の31.2%にあたる。以下、60代が31人で18.2%、70代以上が18人で10.6%、50代が8人で4.7%、最も少なかった20代が2人で1.2%であった。

今後、このアンケートを読み進めていく際には、全体で集計を行った場合、30代から40代の保護者の意向が強く反映されている可能性もあることに注意しながら数字を読み取っていく必要がある。

なお、それぞれの具体的な人数については、【表1-2-2】に示したとおりである。

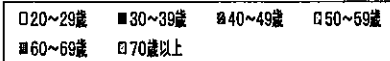
【表1-2-2】

年齢	20~29歳	30~39歳	40~49歳	50~59歳	60~69歳	70歳以上	総計
母親	1	37	23	1	0	0	62人
父親	1	21	30	3	0	0	55人
祖母	0	0	0	4	18	7	29人
祖父	0	0	0	0	13	9	22人
その他	0	0	0	0	0	2	2人
総計	2人	58人	53人	8人	31人	18人	170人

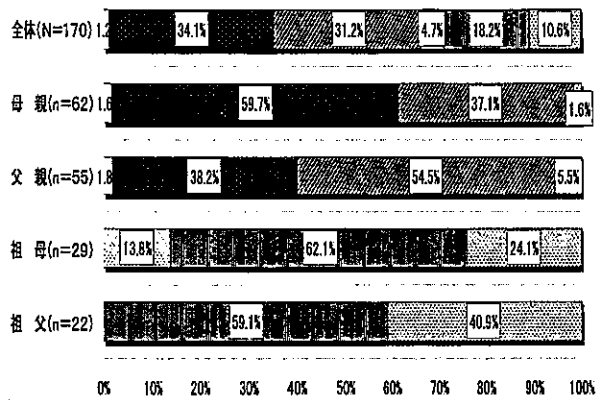
【グラフ1-2-3】は回答者の年齢を子どもに対する続柄別に集計したものである。このグラフから、母親で最も多いのは30代で、これは母親全体の59.7%にあたるのがわかる。それに対して、父親では40代が最も多く、これは父親全体の54.5%にあたる。祖父においては、60代が最も多く、祖母においても同様に60代が最も多かった。祖父と祖母で70代の占める割合を比べると、祖父の方が約16ポイント高い。

【グラフ1-2-3】

B. 現在の年齢



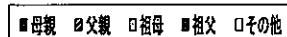
A. 子どもに対する続柄



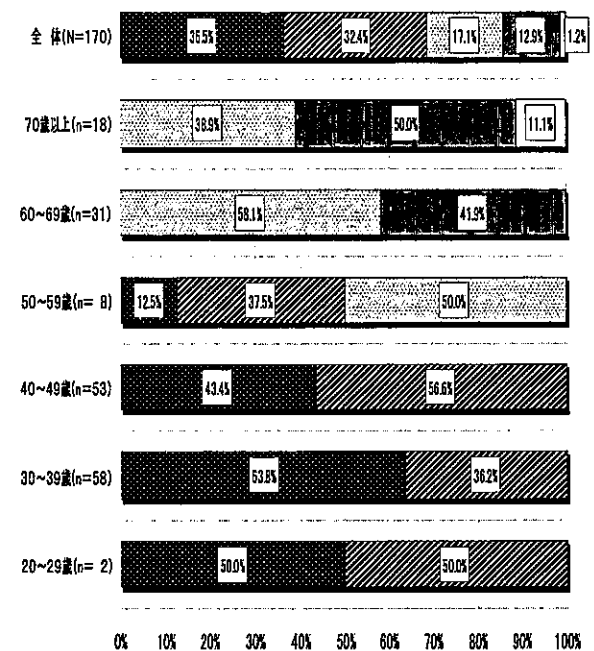
【グラフ1-2-4】は【グラフ1-2-3】の縦と横を入れ替えて回答者の子どもに対する続柄を年齢別に集計したものである。このグラフから20代、30代、40代は父親と母親のみで構成され、50代には母親、父親、祖母が混在し、60代、70代は祖父と祖母のみで構成されていることがわかる。母親の占める割合は、30代において最も多く(63.8%)、以下50代にかけて割合が減少していく。父親は、40代において最も多くなる(56.6%)。60代以上で祖父と祖母の割合を比較すると、60代で祖母の割合が高かったのに対し、70代では祖父の割合が高くなっている。

【グラフ1-2-4】

A. 子どもに対する続柄



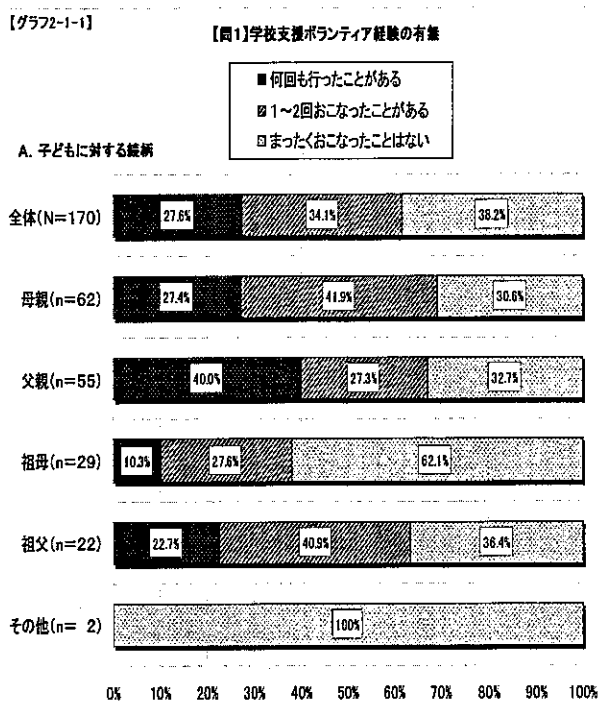
B. 現在の年齢



2節 学校支援ボランティア経験の有無と学校支援ボランティアをおこなった動機

ここでは、回答者のこれまでの学校支援ボランティア経験の有無について見ていくとともに、学校支援ボランティアをおこなった動機について見ていくこととする。特に、学校支援ボランティアの回数と子どもに対する属性および、学校支援ボランティアをおこなった動機との関係に着目し、傾向をとらえていくものとする。

(1) 学校支援ボランティア経験の有無



【グラフ2-1-1】は、子どもや孫が通う学校での学校支援ボランティア経験の有無を続柄別に比較できる形で表したものである。

今回の調査では、経験の有無を「何回もおこなったことがある」「1～2回おこなったことがある」「まったくおこなったことがない」の3つから選択してもらうこととした。つまり、経験の有無を「有る程度継続して経験有り」「多少の経験有り」「まったくおこなったことはない」の3つの立場で回答してもらうこととした。

まず、全体を見てみると、「まったくおこなったことがない」と回答した人が38.2%、「1～2回おこなったことがある」と回答した人が34.1%、「何回もおこなったことがある」と回答した人が27.6%いる。

つまり、保護者集団の約4割の人が学校支援ボランティアに関わりを持ったことがない人であり、その一方で、約6割の人が何らかの形で学校支援ボランティアの経験が有ると回答している。

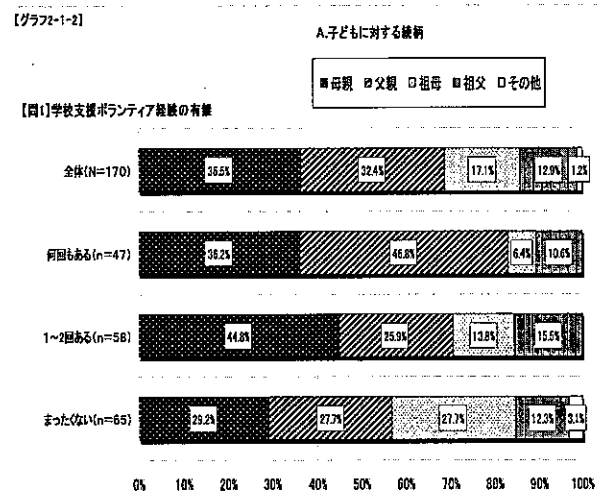
次に、学校支援ボランティア経験の有無を続柄別にみていくこととする。

まず、母親では「何回もおこなったことがある」(27.4%)、「1～2回おこなったことがある」(41.9%)を合わせると69.3%の人が学校支援ボランティアを経験していることになる。これは、他の続柄と比べても最も高い数値である。

一方祖母では、「まったくおこなったことはない」(62.1%)と回答した人が全続柄中最も多く、学校支援ボランティアの経験者が少ないことが分かる。

父親においては、67.3%と母親に次ぎ学校支援ボランティアの経験者がいる。特徴的なのは、父親の場合「何回もおこなったことがある」(40.0%)と回答している人が最も高いことである。「1～2回おこなったことがある」に高い数値を示した母親や祖父とは明らかに違う傾向を示した。

これらのことから、現在、学校支援ボランティアの中心的な役割を果たしているのは母親であるが、母親とは違う形で取り組んでいる父親の存在も貴重なものであるといえる。



【グラフ2-1-2】は【グラフ2-1-1】の縦軸、横軸を入れ替えて、経験の有無を「有る程度継続して経験有り」「多少の経験有り」「まったくおこなったことはない」の3つの立場ごとの占める続柄の割合が比較できるように示したグラフである。

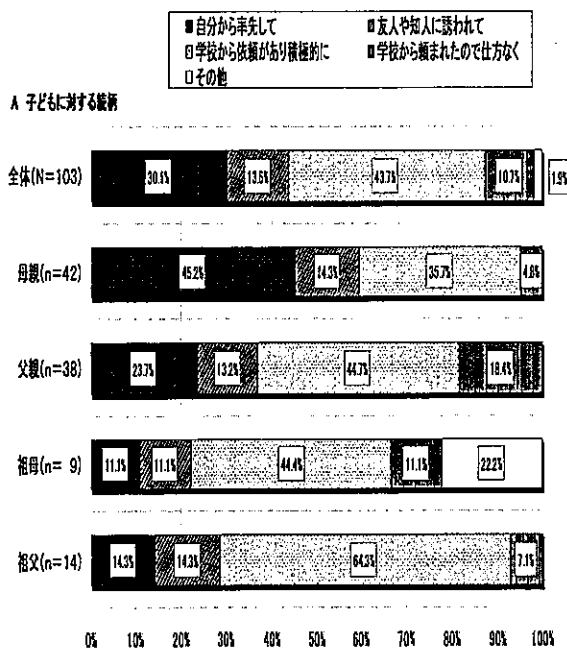
まず、学校支援ボランティアを「何回もおこなったことがある」と回答した人の割合が高い続柄は、

父親の46.8%である。次いで母親の36.5%であった。さらに、「1～2回おこなったことがある」と回答した人でも、母親44.8%、次いで父親の25.9%であった。母親と父親を合わせると、「何回もおこなったことがある」は8割強、「1～2回おこなったことがある」は7割強となり、学校支援ボランティアの中心的な役割を果たしていることが分かる。

(2) 学校支援ボランティアをおこなった動機

【グラフ2-2-1】

【問1】学校支援ボランティアをおこなうきっかけは



【グラフ2-2-1】は、【問1】において、これまでに学校支援ボランティアを②「1～2回おこなったことがある」、③「何回もおこなったことがある」と回答した人に対して、「おこなおうとした動機・きっかけ」を問うた結果を子どもに対する続柄別に比較できる形で示したものである。

まず全体を見てみると、最も多いのが「学校から依頼があり積極的に」と回答した人で43.7%。次いで多いのが「自分から率先して」と回答している人で30.1%である。この2つの「おこなおうとした動機・きっかけ」を合わせると約7割を占めることが分かる。そして、「友人や知人に誘われて」と回答した人が13.6%、「学校から頼まれたので仕方なく」と回答した人が10.7%でそれぞれ約1割強に過ぎなかった。この結果から、学校支援ボランティアに取り組んでいる人の大部分は、積極的な動機で実践した

人であるということが分かる。

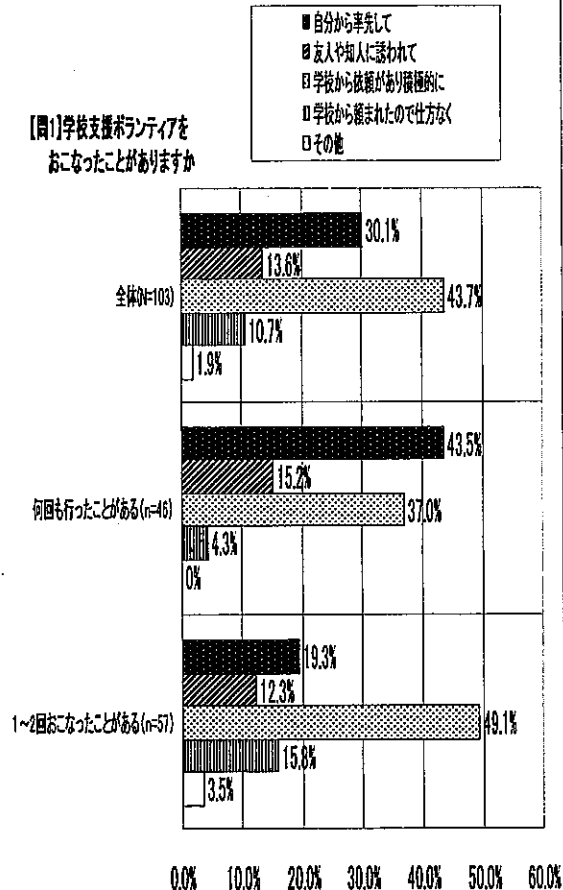
次に、子どもに対する続柄別に見ていくと、特徴的なのは、母親の半数近く(45.2%)は「自分から率先して」と回答していることである。これは次に続く父親の23.7%と比べても21.5ポイントの開きがある。次に、祖父の6割強が「学校から依頼があり積極的に」と回答していることである。やはり次に続く父親の44.7%と比べても19.9ポイントの開きがあった。一方、父親の18.4%が「学校から頼まれたので仕方なく」と回答している。母親や祖父のように自発的な要素が強い動機で学校支援ボランティアをおこなってばかりいないということが分かる。

(3) 学校支援ボランティア経験数と学校支援ボランティアをおこなった動機のカロス集計

【グラフ2-3-1】

【問1】学校支援ボランティアをおこなうきっかけは

【問2】学校支援ボランティアをおこなったことがある回数



【グラフ2-3-1】は、【問1】において、これまでに学校支援ボランティアを②「1～2回おこな

ったことがある」, ③「何回もおこなったことがある」と回答した人に対して, 【問3】「おこなおうとした動機・きっかけ」を問うた結果とをクロス集計し比較できる形で示したものである。

まず全体を見てみると, 最も多いのが「学校から依頼があり積極的に」と回答した人で43.7%。次いで多いのが「自分から率先して」と回答した人で30.1%である。この2つの「おこなおうとした動機・きっかけ」を合わせると約7割を占めることが分かる。そして, 「友人や知人に誘われて」と回答した人が13.6%, 「学校から頼まれたので仕方なく」と回答した人が10.7%でそれぞれ約1割強に過ぎなかった。

次に, 学校支援ボランティアの回数別にみていくこととする。「何回もおこなったことがある」と回答した人の「おこなおうとした動機・きっかけ」で最も多いのが「自分から率先して」と回答した人で43.5%。次に多いのが, 「学校から依頼があり積極的に」と回答した人で37.0%である。次いで, 「友人や知人に誘われて」が15.2%, 「学校から頼まれたので仕方なく」が4.3%になっている。「1~2回おこなったことがある」と回答した人では「おこなおうとした動機・きっかけ」で最も多いのが「学校から依頼があり積極的に」と回答した人で49.1%。次に多いのが, 「自分から率先して」と回答した人で19.3%である。次いで, 「学校から頼まれたので仕方なく」が15.8%, 「友人や知人に誘われて」が12.3%になっている。

この結果から, 学校支援ボランティアに「自分から率先して」取り組んだ人の半数近くは, 1~2回で終わることなく, 何度も学校支援ボランティアとして学校に関わりを持っている人だということが分かる。また, 「学校から依頼があり積極的に」と回答している人の多くは, 学校支援ボランティアとして1ないし2回の取り組みで終わっているということが分かる。さらに言えば, 「学校から頼まれたので仕方なく」と消極的な動機・きっかけで学校支援ボランティアをおこなった人は, 1~2回の経験で終わってしまっているということが分かる。

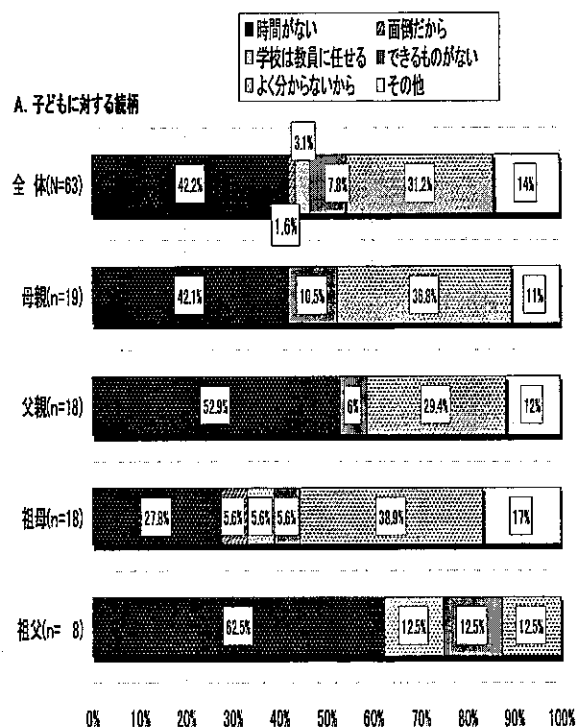
3節 学校支援ボランティア経験のない理由と今後の意向

ここでは, 【問1】の設問「あなたは, これまで, 学校支援ボランティアをおこなったことがありますか」

か」の間に対して, ①「まったくおこなったことはない」と回答した人に「おこなったことがない理由」を問うた結果について見ていくとともに, 学校支援ボランティアをおこなったことのない人たちの今後の意向について探っていくこととする。

【グラフ3-1-1】

【問2】学校支援ボランティア経験のない理由



(1) 学校支援ボランティア経験のない理由

【グラフ3-1-1】は, 【問1】の設問「あなたは, これまで, 学校支援ボランティアをおこなったことがありますか」の間に対して, ①「まったくおこなったことはない」と回答した人に「おこなったことがない理由」を問うた結果について統柄別に比較できる形で表したものである。

まず, 全体を見てみると, 学校支援ボランティアをおこなったことがない理由として2つの要素が挙げられる。1つ目は, 「忙しくて時間がないから」と回答した人で, 全体の42.2%にあたる。2つ目は, 「学校支援ボランティアのことがよくわからないから」と答えた人で, 全体の31.2%にあたる。この2つの理由を合わせると, 全体の7割強にあたる。「自分にもできると思われるものがない」(7.8%), 「学校のことは教員に任せるものだと考えているから」(3.1%), 「面倒だから」(1.5%)はいずれも1割にも満たなかった。さらに, 「関心がないから」に至っては, 1人も回答することはなかった。

つまり、母親・父親・祖母・祖父という保護者集団は、どの続柄であっても、「関心がないから」、「面倒だから」、「学校のことは教員に任せるものだと考えているから」等の理由で学校支援ボランティアをおこなっていない理由ではないことが分かる。

続いて、子に対する続柄で学校支援ボランティアをおこなったことがない理由を見ていくと、特徴的なのは、父親と祖父の「忙しくて時間がないから」と回答した人の割合の高さである。父親では5割強、祖父では、6割強に上る。それとは対照的に祖母は3割弱と少ない。また、「学校支援ボランティアのことがよくわからないから」では、祖母(38.9%)や母親(36.8%)の割合が高く、特に、祖母の場合、時間的な余裕がないわけではなく、むしろ、学校支援ボランティアのことがよくわからないということが大きな要因の一つになっていると言える。

さらに、「自分にもできると思われるものがない」を見ていくと、母親では10.5%、祖母では5.6%の回答があり、学校支援ボランティアのことがよくわからないからこそ、自分にもできるものがないと考えてしまう節があるのではないかとと思われる。「学校支援ボランティアのことがよくわからないから」と「自分にもできると思われるものがない」とを合わせてみると、母親で47.3%、祖母では44.5%になる。

(2) 学校支援ボランティアに対する今後の意向

前項においては、学校支援ボランティア経験のない保護者集団に、その理由を問い、その現状についてみてきた。ここでは、それらを踏まえて、【問3】の質問「今後、もし学校支援ボランティアをおこなうとしたら、どのような分野でおこなってみたいですか」について今後の意向を見ていくこととする。

【グラフ3-2-1】は、【問1】において、学校支援ボランティアを「まったくおこなったことがない」と回答した人に対して「今後、もし学校支援ボランティアをおこなうとしたら、どのような分野でおこなってみたいですか」を問うた結果について続柄別に比較できる形で示したグラフである。

まず、全体を見ていくこととする。回答の割合が多かったものから順に挙げていくと、最も多かったのが「農園活動・花壇の整備・校庭の美化などの支援」と「登下校の安全への支援」でともに23.8%。続いて「クラブ・学校行事への支援」(15.9%)、「校外学習の引率などの支援」(14.3%)、「各教科・総合的な学習・道徳などの学習支援」(6.3%)、「読み聞

かせ・図書の修繕など読書活動への支援」(4.8%)、「課外活動への支援」(4.8%)となっている。

割合が一番多かった2つの項目について考えてみると、「農園活動・花壇の整備・校庭の美化などの支援」については、アンケートを実施した学校の実情が反映されているものと思われる。実施校は過去全国緑化コンクールにおいて準大賞を受賞した経緯があり、また、矢板市銘木100選のつづじが敷地内にあるため、関心が高い部分ではないかと思われる。

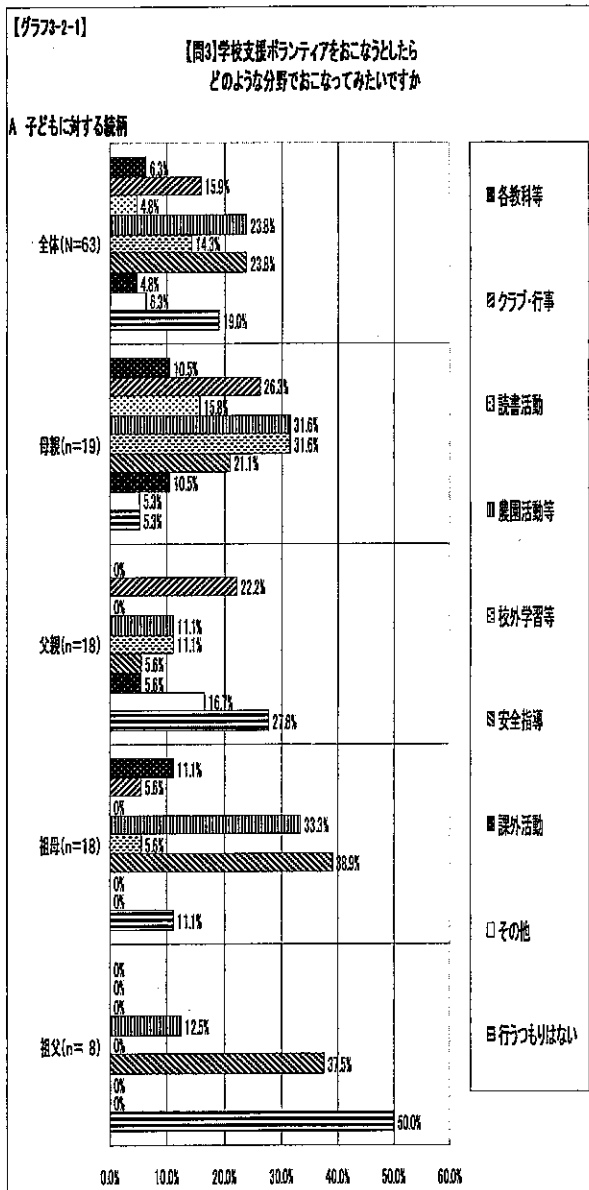
「登下校の安全への支援」については、子どもたちの安全確保は、何をおいても優先されるべき大切な課題という思いが表れているのではないかとと思われる。この2つに共通して言えることは、教えるという要素が他の学校支援ボランティアよりも少ないということではないかとも考えられる。一方割合が少なかった「各教科・総合的な学習・道徳などの学習支援」「読み聞かせ・図書の修繕など読書活動への支援」「課外活動への支援」などを考えてみると、子どもたちの前に出て教えるという要素が強いため敬遠されているのではないかと考えられる。

次に、続柄別にみていくと、それぞれの属性ごとに特徴的な傾向を見ることができる。

母親では、「農園活動・花壇の整備・校庭の美化などの支援」(31.6%)はさることながら、「校外学習の引率などの支援」(31.6%)も同様の高い割合を示していた。さらに、「クラブ・学校行事への支援」(26.3%)「読み聞かせ・図書の修繕など読書活動への支援」(15.8%)への関心の高さを伺うことができる。父親では、「クラブ・学校行事への支援」(22.2%)と高い割合を示しているものの、「特にない・おこなうつもりがない」とする考えが27.8%と一番多い回答であった。祖母は、全体的な傾向と近く、「農園活動・花壇の整備・校庭の美化などの支援」(33.3%)と「登下校の安全への支援」(38.9%)に回答が集中した。祖父は、「登下校の安全への支援」に37.5%と高い割合を示しているが、父親以上に「特にない・おこなうつもりがない」とする考えが50.0%と一番多い回答であった。

父親と祖父に関しては、前項の学校支援ボランティアをおこなったことのない理由の現状と照らし合わせてみても、時間的なもの等、実施できない要因があるものと思われる。

一方母親と祖母に関しては、機会があれば、学校支援ボランティアとして活動する人がさらに出てくるのではないかと考えられる。



4節 学校支援ボランティアの活動分野

ここでは、【問1】の設問「あなたは、これまで、学校支援ボランティアをおこなったことがありますか」の間で、②「1～2回おこなったことがある」、③「何回もおこなったことがある」と回答した人に対して、どのような分野で取り組んでいるのかを属性別および、動機別にみていくこととする。

(1) 学校支援ボランティアの活動分野

【グラフ4-1-1】は、【問1】において、学校支援ボランティアを「1～2回おこなったことがある」、「何回もおこなったことがある」と回答した人に対して「どのような分野でおこなったことがあるか」を問うた結果について続柄別に比較できる形で示し

たグラフである。この間は、おこなった分野をいくつでも選んでよい複数回答形式をとった。

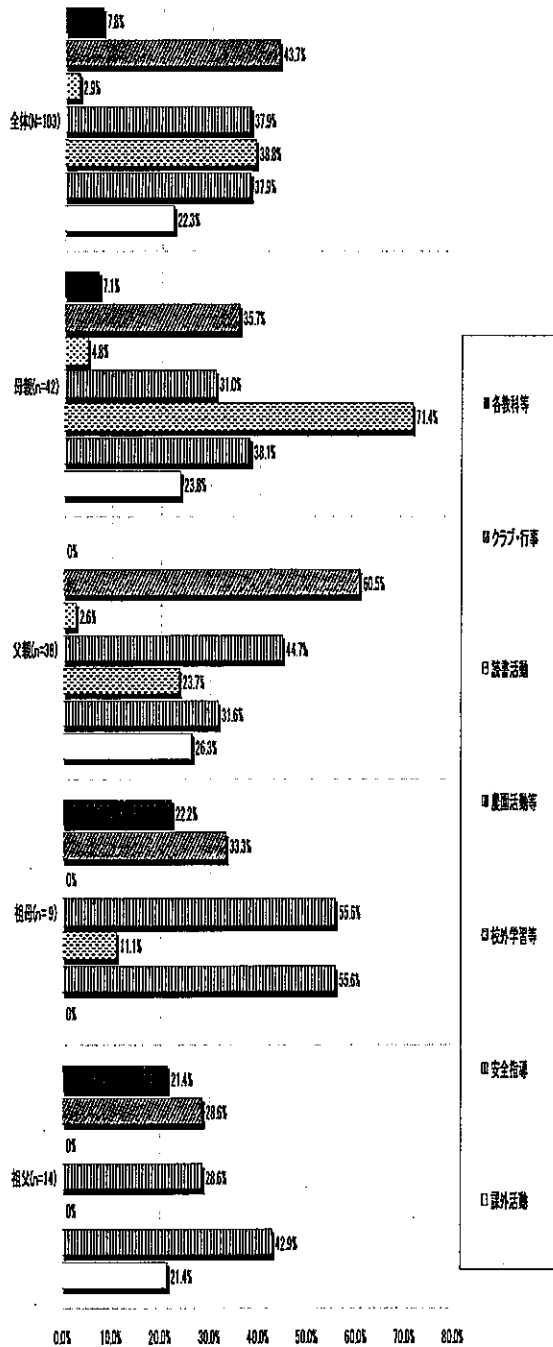
まず全体をみていくこととする。回答の割合が多い主だったものを挙げてみると、最も多かったのが「クラブ活動・学校行事への支援」で43.7%。続いて「校外学習の引率などの支援」で38.8%。そして、「農園活動・花壇の整備・校庭の美化などの支援」(37.9%)、「登下校の安全への支援」(37.9%)である。これら4つの分野は、4割前後の回答があり、現在おこなわれている学校支援ボランティア活動の中心と言える。一方、回答が少ないものでは「各教科・総合的な学習の時間・道徳などの学習支援」(7.8%)、「読み聞かせ・図書の修繕など読書活動への支援」(2.9%)が挙げられる。ただ、この「読み聞かせ・図書の修繕など読書活動への支援」は、アンケート実施校の場合、読み聞かせのボランティアが定期的に活動している実情もあり、学校支援ボランティアの活動分野外として考えられている背景が反映した上での割合になっている。そのため、事実上は「各教科・総合的な学習の時間・道徳などの学習支援」の活動が最も少ないということになる。これは、「3節(2)学校支援ボランティアに対する今後の意向」でも触れているが、学校支援ボランティア経験の無い人でも「各教科・総合的な学習の時間・道徳などの学習支援」の回答は少なかった。この活動は、ある程度専門的な知識・技能が必要であると思われる分野であるため、活動に躊躇する傾向にあるものと思われる。

次に、続柄別の傾向をみていくと、母親では「校外学習の引率などの支援」に7割を超える回答が集まっているのが特徴的である。父親では、「クラブ活動・学校行事への支援」に6割を超える回答が集まっているのが特徴的である。祖母では、「農園活動・花壇の整備・校庭の美化などの支援」と「登下校の安全への支援」に5割を超える回答が集まっているのが特徴的である。最後に祖父では、「登下校の安全への支援」に4割を超える回答が集まっているのが特徴的である。また、祖母と祖父においては、「各教科・総合的な学習の時間・道徳などの学習支援」にも2割を超す回答があったのが特徴的と言える。

これらの結果から、属性ごとの特徴は、それぞれの役割および得意分野の違いと考えることができる。母親は母親なりの、父親は父親なりの方法で学校に関わりを持ち、自分の得意分野を生かしているという実情が得られた。

【問5】どのような分野で学校支援ボランティアをおこなったことがありますか

A 子どもに対する支援



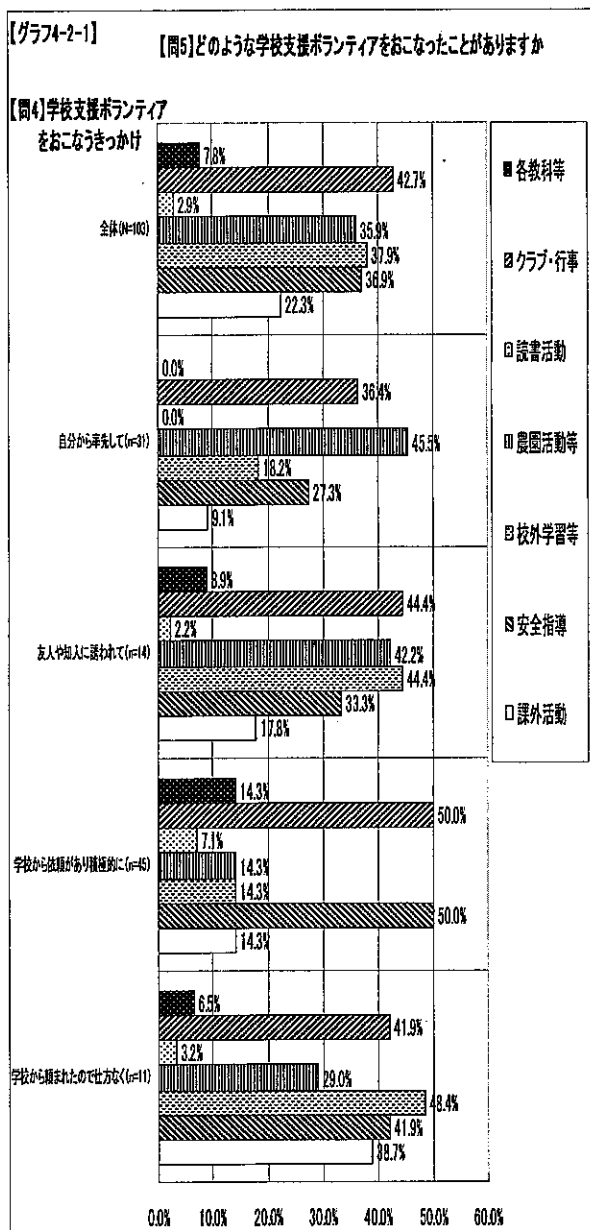
(2) 学校支援ボランティアの活動分野と学校支援ボランティアをおこなった動機のクロス集計

【グラフ4-2-1】は、【問4】「学校支援ボランティアをおこなおうとした動機・きっかけは何か」と【問5】「どのような分野でおこなったことがあるか」をクロス集計してグラフ化したものである。

はじめに、学校支援ボランティアをおこなおうとした動機・きっかけとして「学校から依頼があり積極的に」と回答した人は「クラブ活動・学校行事への支援」(50.0%)と「農園活動・花壇の整備・校庭の美化などの支援」(50.0%)に偏りを見せているという点である。つまり、裏を返せば、学校からの依頼はこの2点に頻度が偏っていると言える。事実、「学校から頼まれたので仕方なく」と回答した人も「クラブ活動・学校行事への支援」(41.9%)と「農園活動・花壇の整備・校庭の美化などの支援」(41.9%)と高い割合を示している。ただ、「学校から頼まれたので仕方なく」と回答した人の場合これら以上に「校外学習の引率などの支援」と回答した人の割合が高いことも見逃せないことである。

次に、学校支援ボランティアをおこなおうとした動機・きっかけとして「学校から頼まれたので仕方なく」と回答した人および、「友人や知人に誘われて」と回答している人の最も多い活動分野は「校外学習の引率などの支援」と回答した人であるということである。「学校から頼まれたので仕方なく」と回答した人では48.4%、「友人や知人に誘われて」と回答した人では44.4%であった。このことから、推測の域ではあるが、学校から校外学習の児童引率の依頼があった場合、仕方なくおこなっている人は、一人でおこなうことなく、友人や知人に声を掛け一緒におこなっているという姿が見えてくる。

さらに、学校支援ボランティアをおこなおうとした動機・きっかけとして「自分から率先して」と回答している人の45.5%が「農園活動・花壇の整備・校庭の美化などの支援」をおこなっているということである。つまり、前節でも触れているが、アンケート実施校の環境への取り組みが保護者集団にも浸透し、主体的な活動が実践されているものと思われる。また、主体的な活動が実践されるということは、学校支援ボランティアを实践したいと考えている人の思いを受け入れる態勢もできているのではないかと思われる。そういう観点から見ると、学校支援ボランティアをおこなおうとした動機・きっかけとして「自分から率先して」と回答している人の2番目に高い割合を示した「クラブ活動・学校行事への支援」(36.4%)や3番目に高い割合を示した「登下校の安全への支援」(27.3%)等においても受け入れ態勢ができ、さらには、学校、学校支援ボランティア相互のニーズが一致している分野ではないかと思われる。



5 節 学校支援ボランティア経験による自己の変容

ここでは、【問1】の設問「あなたは、これまで、学校支援ボランティアをおこなったことがありますか」の問に対して、②「1～2回おこなったことがある」、③「何回もおこなったことがある」と回答した人に【問6】「学校支援ボランティアをおこなってみて、ご自身にはどのような影響や変化がありましたか」と問うた結果について見ていくこととする。主に、「学校支援ボランティアの実施回数」との関係および、「おこなおうとした動機・きっかけ」との関係をクロス集計し、様々な角度から自己の変容について追っていきたい。

(1) 学校支援ボランティア経験による自己の変容

【グラフ5-1-1】は、【問1】において、学校支援ボランティアを「1～2回おこなったことがある」、「何回もおこなったことがある」と回答した人に対して「学校支援ボランティアをおこなってみて、ご自身にはどのような影響や変化がありましたか」を問うた結果について続柄別に比較できる形で示したグラフである。この問いは、いくつでも選んでよい複数回答形式をとっている。

まず全体を見てみると、6割以上の方が「自分の子(孫)だけでなく、他の子(孫)のことが分かるようになった」(69.9%) および、「学校や子どもたちのことが分かるようになった」(65.0%) と回答している。今回設定した九つの選択肢の中では、この二つは群を抜いて高い割合を示している。以下、割合が高い順に「新しい仲間と出会ったり、交流が生まれたりした」(41.7%)、「自分の子(孫)のことが、より分かるようになった」(21.4%)、「自分の成長につながった」(19.4%)、「もっと学校や子どもたちに関わりたと思うようになった」(13.6%)、「自分の気持ちに張りあいが出た」(10.7%)、「自ら学ぶ意欲が向上した」(5.8%) という結果になった。

ここで特筆すべき点は、高い割合を示した2つの結果からも分かるように、学校支援ボランティアをおこなうことにより、学校理解や児童理解が進むという点である。「百聞は一見にしかず」であり、今まで知っていそうで知らなかった、学校世界の一端に触れることができた実感している表れである。また、「新しい仲間と出会ったり、交流が生まれたりした」と回答した人が4割いた。このことは、学校を核とした、保護者集団による地域のネットワーク網の充実につながっているものと思われる。

もう一点は、「自分の成長につながった」と回答している人が約2割いたことである。多い少ないはともかく、5人に1人が活動を通して自分自身の成長を実感しているという点である。これらのことから、学校支援ボランティアをおこなうことにより、何らかの自己の変容が期待できるものであるということがいえるのではないだろうか。また、学校や子どもたちのことを保護者集団および地域に知ってもらうための一つの契機になるのではないかと考える。

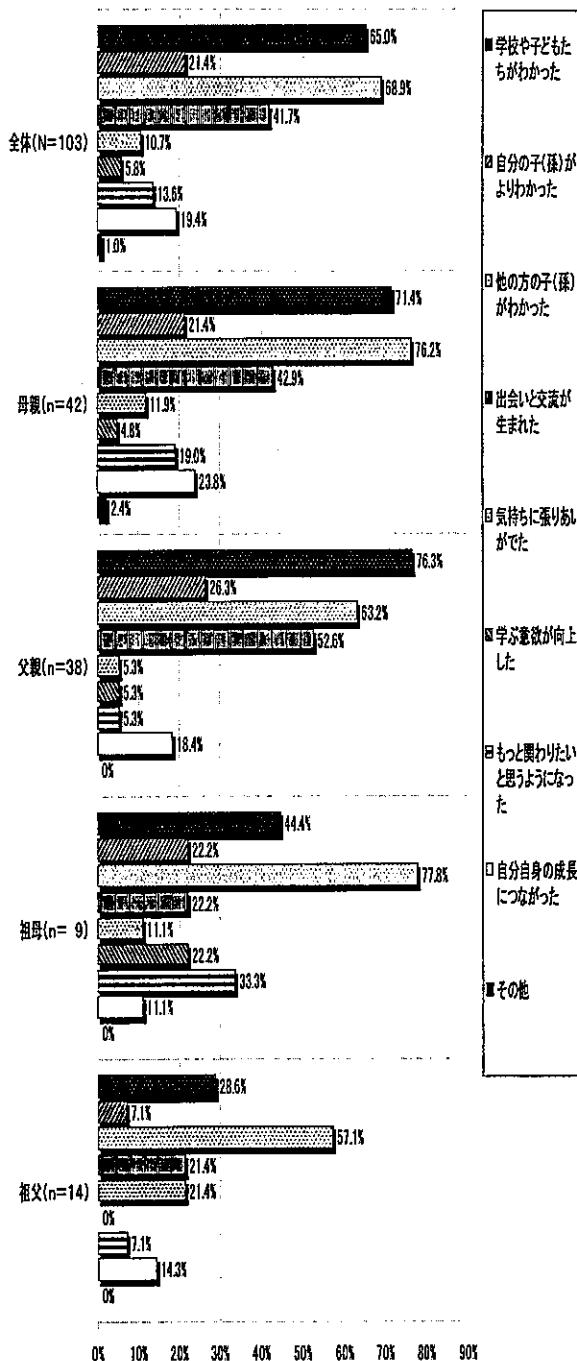
次に、子どもに対する続柄で見えていくと、特徴的なものとして、父親の約8割弱(76.3%)の人が「学校や子どもたちのことが分かるようになった」と回答し、さらに、約5割(52.6%)の人が「新しい仲

間と出会ったり、交流が生まれたりした」と回答している点である。その他は、おおむね全体と同じような傾向ではあるが、あえて言うならば、祖母において「もっと学校や子どもたちに関わりたいと思うようになった」(33.3%)と回答している人が他の続柄に比べ高かった点である。さらに、「自ら学ぶ意欲が向上した」(22.2%)も高く、祖母ならではの回答と思われる。

【グラフ5-1-1】

【問6】学校支援ボランティアをおこなってみて、ご自身にはどのような影響や変化がありましたか

A 子どもに対する継続



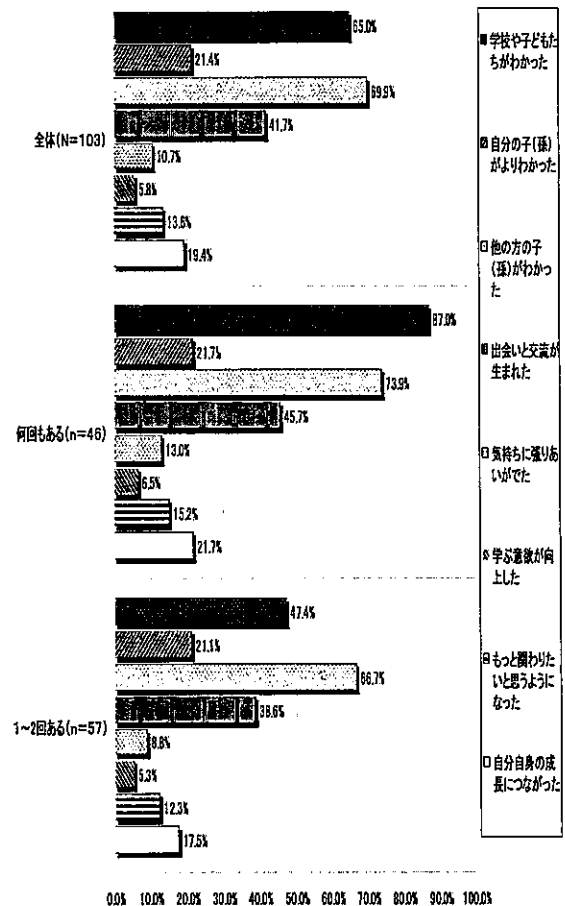
(2) 学校支援ボランティア経験による自己の変容と学校支援ボランティア経験数のクロス集計

次に、【問6】「学校支援ボランティアをおこなってみて、ご自身にはどのような影響や変化がありましたか」と問うた結果と【問1】「学校支援ボランティアの実施回数」との関係についてみていくこととする。

【グラフ5-2-1】

【問6】学校支援ボランティアをおこなってみて、ご自身にはどのような影響や変化がありましたか

【問1】学校支援ボランティアをおこなったことがありますか



【グラフ5-2-1】は、【問1】において、学校支援ボランティアを「1~2回おこなったことがある」、「何回もおこなったことがある」と回答した人に対して「学校支援ボランティアをおこなってみて、ご自身にはどのような影響や変化がありましたか」(複数回答)を問うた結果をクロス集計し、グラフ化したものである。

全体的なことについては、前項「(1) 学校支援ボランティア経験による自己の変容」において触れているので、ここでは触れないこととする。

学校支援ボランティア経験の回数別にみていくと、

「何回もある」と回答している人の実に87.0%が「学校や子どもたちのことが分かるようになった」と言っているのに対し、「1～2回ある」と回答している人は、同項目において47.4%で、比較すると39.6ポイントの差が開いている。このポイントの差は、単純に考えても、学校支援ボランティアで何度も学校を訪れている人は、それだけ学校理解・児童理解が深まっているのである。また、ポイント差は少ないものの「自分の子(孫)だけでなく、他の子(孫)のことが分かるようになった」や「新しい仲間と出会ったり、交流が生まれたりした」、「自分の子(孫)のことが、より分かるようになった」等においても同様に、学校に足を運んだ回数が多いほど、出会いと交流が生まれたり、子どもたちのことが分かるようになっていく傾向にある。

その他の項目については、「何回もある」と回答している人と「1～2回ある」と回答している人の差は5ポイント以内であった。このことから、自分自身の向上心や学習意欲は学校支援ボランティアの経験の差から生じるものでなく、自分自身の生き方や姿勢に依存するところが大きいと言えるのではないだろうか。

(3) 学校支援ボランティア

次に、【問6】「学校支援ボランティアをおこなってみて、ご自身にはどのような影響や変化がありましたか」と問うた結果と【問4】「学校支援ボランティアをおこなおうとした動機・きっかけ」との関係についてみていくこととする。

【グラフ5-3-1】は、【問4】「学校支援ボランティアをおこなおうとした動機・きっかけ」と「学校支援ボランティアをおこなってみて、ご自身にはどのような影響や変化がありましたか」(複数回答)を問うた結果をクロス集計し、グラフ化したものである。

全体的なことについては、前項「(1) 学校支援ボランティア経験による自己の変容」において触れているので、ここでは触れないこととする。グラフの数値で全体が前項と変わっているが、これは、【問4】「学校支援ボランティアをおこなおうとした動機・きっかけ」において、その他を選択した2名を除いたために生じたものである。

学校支援ボランティアをおこなおうとした動機・きっかけを中心にみていくと、特徴的なものとして「友人や知人に誘われて」と回答している人の

64.3%が「新しい仲間と出会ったり・交流が生まれたりした」を選択している。さらにおもしろいことに、「自分自身の成長につながった」も35.7%と高い割合を示していた。このことから、新しい仲間・新しい交流のひろがり、自分自身の成長の一部と考えているのではないかと推測できる。

声を掛け合う、または、声を掛け合えるような関係づくりは、学校支援ボランティアを展開する上で大切な一要素になるのではないかと考えられる。

【グラフ5-3-1】

【問6】学校支援ボランティアをおこなってみて、ご自身にはどのような影響や変化がありましたか

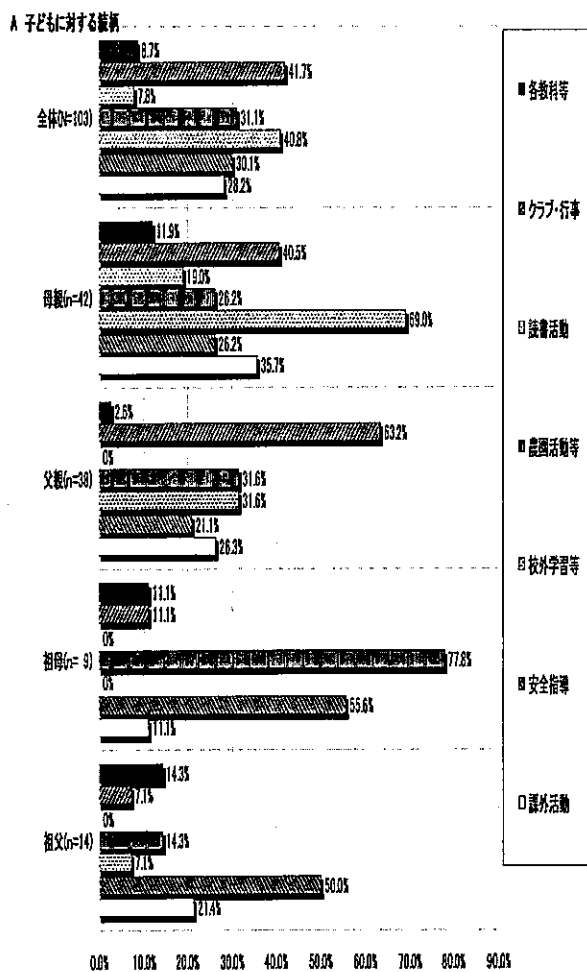


6節 学校支援ボランティアの今後の意向

ここでは、【問1】の設問「あなたは、これまで、学校支援ボランティアをおこなったことがありますか」の問に対して、②「1～2回おこなったことがある」、③「何回もおこなったことがある」と回答した人に【問7】「今後引き続き、学校支援ボランティアをおこなうとしたらどのような分野でおこなってみたいですか」および、【問8】「学校支援ボランティアをおこなうとしたら、どのような点を充実させた方がよいとお考えですか」と問うた結果について見ていくこととする。

(1) 学校支援ボランティア今後の活動分野の意向

【グラフ6-1-1】 【問7】学校支援ボランティアをおこなうとしたら、どのような分野でおこなってみたいですか



【グラフ6-1-1】は、【問1】において、学校支援ボランティアを「1～2回おこなったことがある」、「何回もおこなったことがある」と回答した人に対

して「今後引き続き、学校支援ボランティアをおこなうとしたらどのような分野でおこなってみたいですか」を問うた結果について続柄別に比較できる形で示したグラフである。この問いは、いくつ選んでもよい複数回答形式をとっている。

まず全体を見てみると、4割を超す回答に「クラブ活動・学校行事への支援」(41.7%)と「校外学習の引率などの支援」(40.8%)がある。3割台では、「農園活動・花壇の整備・校庭の美化などの支援」(31.1%)と「登下校の安全への支援」(30.1%)となっている。2割台では、「課外活動への支援」(28.2%)

がある。「各教科・総合的な学習の時間・道徳などの学習支援」(8.7%)、「読み聞かせ・図書の修繕など読書活動への支援」(7.8%)は、1割にも達していないことが分かる。ここで考えられるのが、本節において問うたものは、「学校支援ボランティア今後の活動分野の意向」であったが、実は、4節において触れた「どのような分野で学校支援ボランティアをおこなったことがあるか」の回答とほぼ同様の結果が得られたということである。つまり、学校支援ボランティアの活動分野は、一度取り組んだことのある馴染みの分野を次も希望するということが見えてくる。各教科で実践した人は次回も各教科で、農園活動をおこなった人は次回も農園活動でということである。個人の範疇を超えることなく、できる範囲で、また、自分の得意なものを生かして取り組んでいるという実情が見えてくる。逆の視点から考えると、一度経験することにより、次回もその分野での活動が期待できるということである。「各教科・総合的な学習の時間・道徳などの学習支援」や「読み聞かせ・図書の修繕など読書活動への支援」等の活性化のヒントにもなりそうな結果と言える。

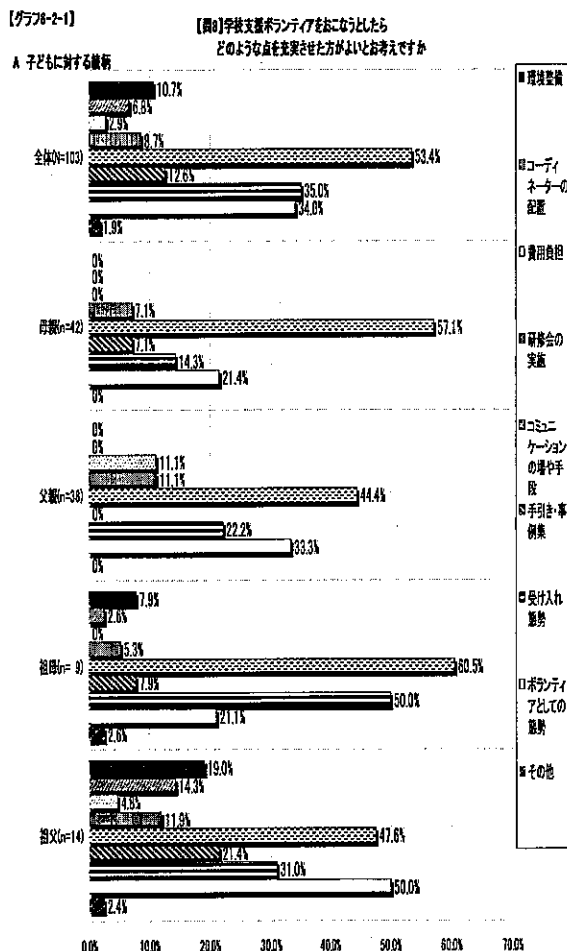
次に、続柄別に特徴的な傾向をみていくと、母親では「校外学習の引率などの支援」に7割弱(69.0%)、父親では、「クラブ活動・学校行事への支援」に約6割(63.2%)、祖母では、「農園活動・花壇の整備・校庭の美化などの支援」(77.8%)と「登下校の安全への支援」(55.6%)が5割を超え、最後に祖父では、「登下校の安全への支援」(50.0%)に5割の回答が集まっている。

これらの結果から、子に対する続柄ごとの特徴は、それぞれの生活時間の違いから生まれてくるものと考えられる。母親は父親と比べると、どちらかといえば正規雇用者として働いている人は少なく、パー

トタイマーなどの時間的に融通が利く立場の人が多いため、「校外学習の引率などの支援」のように、急な依頼にも対応でき、抵抗なく取り組めるものと考えられる。父親の場合、仕事で休みを取るにも計画的に取らなくてはならないので、「クラブ活動・学校行事への支援」等、大きな行事に照準を合わせて休みを取っているものと思われる。祖母や祖父に関しては、午後の空いている時間を利用し「登下校の安全への支援」等の活動ができる状況にあるということが推測される。

回答割合の高いものは、時間的な要因が働いていたが、「各教科・総合的な学習の時間・道徳などの学習支援」や「読み聞かせ・図書の修繕など読書活動への支援」などのように回答割合の低いものは、ある程度専門的な知識・技能が必要であるため、そういう知識・技能を持った人でないと取り組むことができないという特徴がある。

(2) 学校支援ボランティアをおこなうにあたっての条件



【グラフ6-2-1】は、【問1】において、学校支援ボランティアを「1～2回おこなったことがある」、「何回もおこなったことがある」と回答した人に対して「学校支援ボランティアをおこなうとしたら、どのような点を充実させた方がよいとお考えですか」を問うた結果について統柄別に比較できる形で示したグラフである。この問は、いくつ選んでもよい複数回答形式をとっている。

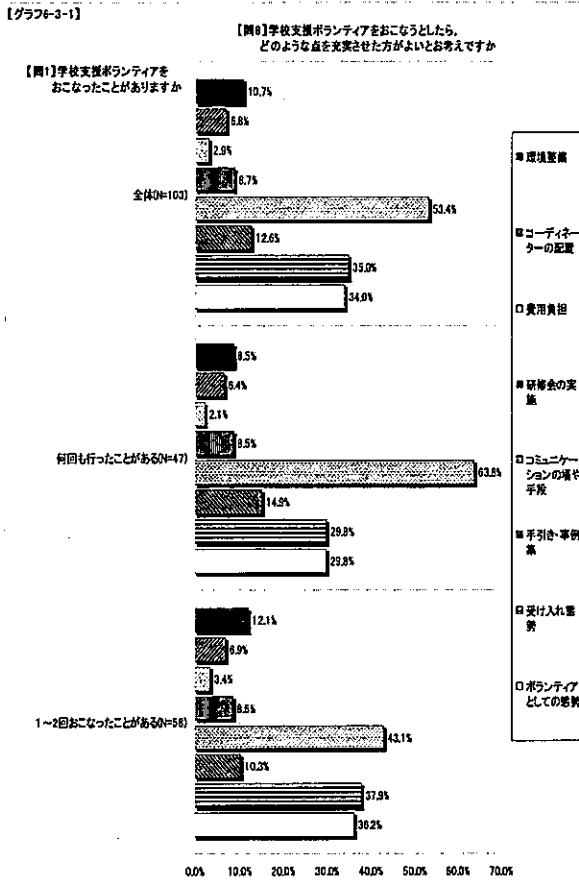
なお、この設問においては、「充実させた方がよいことは」と問うたが、この設問の真意は、現在学校支援ボランティアを実施している上で十分でない点、つまり課題が浮き彫りになることを期しての設問である。

まず全体をみると、まず目に付くのが、「教員とのコミュニケーションの場や手段」の必要性を感じている人が約半数（53.4%）いるということである。学校および教員にとって、受け入れるにあたっての時間の確保は難しいことかもしれないが、そう感じている人が半数いるということは、今後検討しなければならない最重要課題だといえる。回答率は低かったが「学校支援ボランティアコーディネーターの配置」（6.8%）や「手引き・事例集などの作成と発行」（12.6%）等は「教員とのコミュニケーションの場や手段」を解決する一つの方策になるものと考えられる。

回答の割合が高いものに、「学校側の受け入れ態勢および姿勢」（35.0%）、「学校支援ボランティアとしての態勢および姿勢」（34.0%）も挙げられる。どちらも、受け入れる側、実施する側ともに態勢および姿勢が問われたわけだが、同等の数値が出たということは、学校のことも自分のことも客観的に振り返ったからではと思われる。この2点においても、「学校支援ボランティアコーディネーターの配置」や「手引き・事例集などの作成と発行」も有効な方策になるものと考えられる。

次に、子どもに対する統柄で見えていくと、特徴的なものとして、祖母の半数（50.0%）が「学校側の受け入れ態勢および姿勢」の改善を要望している。「教員とのコミュニケーションの場や手段」も6割を超える（60.5%）要望があることから互いに関連しあっているものと思われる。また、祖父では逆に、「学校支援ボランティアとしての態勢および姿勢」の至らなさを痛感している人が半数（50.0%）いる。祖母と祖父では捉え方に違いがあった。

(3) 学校支援ボランティアをおこなうにあたっての条件と学校支援ボランティア経験数のクロス集計



【グラフ6-3-1】は、【問1】において、学校支援ボランティアを「1~2回おこなったことがある」、「何回もおこなったことがある」と回答した人に対して「学校支援ボランティアをおこなうとしたら、どのような点を充実させた方がよいとお考えですか」(複数回答)を問うた結果をクロス集計し、グラフ化したものである。

全体的なことについては、前項「(2) 学校支援ボランティアをおこなうにあたっての条件」において触れているので、ここでは触れないこととする。

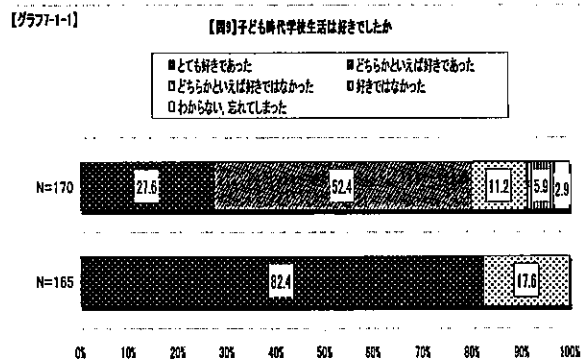
特徴的なこととして、学校支援ボランティア経験の回数別にみていくと、「何回もある」と回答している人の63.8%が「教員とのコミュニケーションの場や手段」と言っているのに対し、「1~2回ある」と回答している人は、同項目において43.1%で、比較すると20.7ポイントの差が開いている。このことは、前節の傾向で述べた「実施すればするほど児童理解・学校理解が深まる」とは対照的に、「実施すればするほど、教員とのコミュニケーションの場や

話し合う時間が必要である」ということになる。今まで学校側にとって、何度も来ているから大丈夫だろうと思われがちだった人たちが、実は今まで以上に話し合いが必要だということに気づかされる結果となった。

7節 回答者の子ども時代の学校生活に対する意識と学校支援ボランティア経験の有無との関係

これまで、回答者がおこなっている学校支援ボランティアの実情についてみてきたが、ここからは、【問1】「学校支援ボランティアをおこなったことがありますか」と【問9】「子ども時代学校生活は好きでしたか」の関係、および、【問9】「子ども時代学校生活は好きでしたか」と【問10】「子どもの時、学校生活のどのような点が好きでしたか。また、好きになれませんでしたか」との関係についてみていくこととする。

(1) 回答者の子ども時代の学校生活に対する意識



【グラフ7-1-1】の上段は、アンケート対象者すべてを対象に、【問9】「子ども時代学校生活は好きでしたか」をまとめ、グラフ化したものである。今後論を展開する上で、「わからない、忘れてしまった」と回答した人については欠損値として扱うため、全体は165人となる。また、「とても好きであった」および、「どちらかといえば好きであった」を「好き群」、「どちらかといえば好きではなかった」および、「好きではなかった」を「嫌い群」として一括りの集団として捉えていくこととする。【グラフ7-1-1】の下段にグラフ化した。

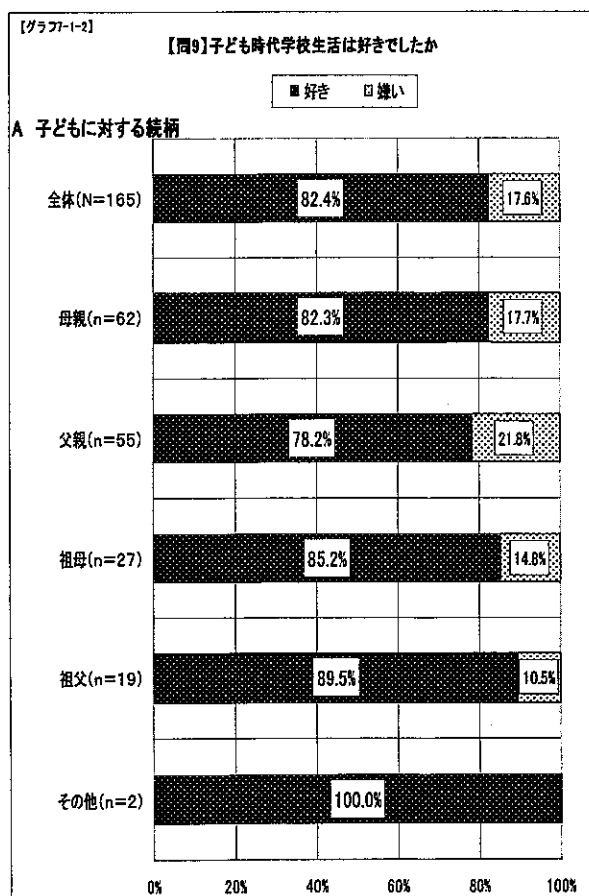
まず全体を見てみると、保護者集団の約8割

(82.4%)の人が「好き群」に属する。お父さん、お母さん、おじいちゃん、おばあちゃんになっても、過去の学校生活をよき思い出と捉えている人がこれほど多いことには目を見張るものがある。一方、「嫌い群」に属する人は2割弱(17.6%)いる。「わからない、忘れてしまった」と回答した人がわずか5人(2.9%)と少ないことから、「好き群」「嫌い群」に関わりなく、学校生活の印象は生涯を通じて心に刻まれているものといえる。

次に、【グラフ7-1-2】は、アンケート対象者すべてを対象に、【問9】「子ども時代学校生活は好きでしたか」を問うた結果について続柄別に比較できる形で示したグラフである。

全体については前述しているのでここでは触れず、子に対する続柄別に傾向を捉えていくこととする。

グラフを見渡すと、ほぼ全体の傾向と一致し、続柄別の大きな特徴は見られない。祖父を除いては全体と比較して5ポイント以内で推移している。「好き群」の中では祖父の割合が最も高く89.5%であった。これは、全体と比較すると7.1ポイント上回る結果であった。「嫌い群」の中では、父親の割合が最も高く21.8%であった。これは、全体と比較すると4.2ポイント上回る結果であった。



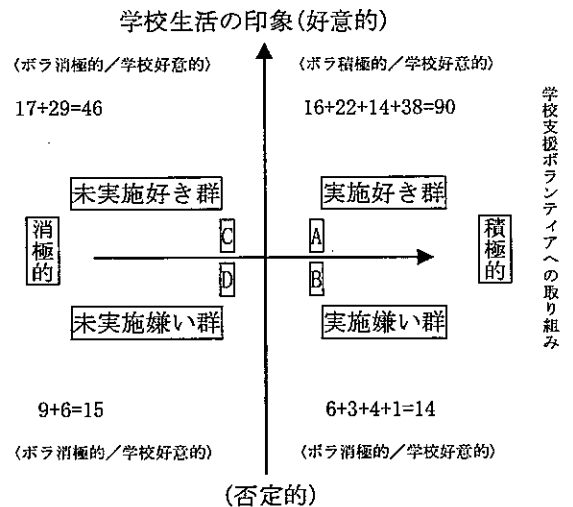
(2) 回答者の子ども時代の学校生活に対する意識と学校支援ボランティア経験の有無のクロス集計

【表7-2-1】

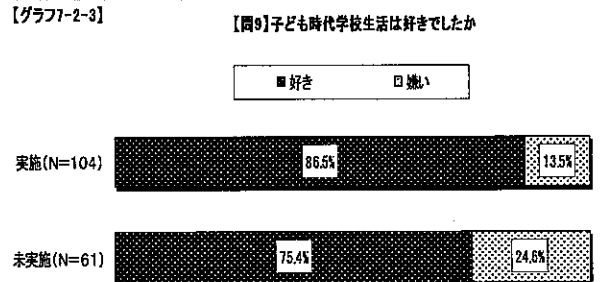
学校支援ボランティアの経験と小学校時代の学校生活の印象のクロス集計表

小学校時代の学校生活の印象	好き群		嫌い群		欠損扱い	総計
	とても好きであった	どちらかといえば好きであった	どちらかといえば好きではなかった	好きではなかった		
実施群	16	22	6	3	0	47人
未実施群	14	38	4	1	1	58人
未実施群	17	29	9	6	4	65人
総計	47人	89人	19人	10人	5人	170人

【座標7-2-2】



【グラフ7-2-3】



【表7-2-1】は、【問1】「学校支援ボランティアをおこなったことがありますか」と【問9】「子ども時代学校生活は好きでしたか」を問うた結果をクロス表として表したものである。今後論を展開する上で、【問1】において、学校支援ボランティアを「1～2回おこなったことがある」、「何回もおこなったことがある」と回答した人を「実施群」、「まったくおこなったことがない」と回答した人を「未実施群」

とグループ化する。また、前項でも触れたが、ここでも、「とても好きであった」および、「どちらかといえば好きであった」を「好き群」、「どちらかといえば好きではなかった」および、「好きではなかった」を「嫌い群」とグループ化し一括りの集団として捉えていくこととする。

さらに、【座標 7-2-2】は、【表 7-2-1】を元にして、「実施好き群」、「未実施好き群」、「実施嫌い群」、「未実施嫌い群」の4つのグループに表したものである。

【座標 7-2-2】よりまず言えることは、一番多かったのが「子ども時代学校が好き」と答え、なおかつ「学校支援ボランティアをおこなったことがある」と答えている「実施好き群」(90人)である。次に多いのが、「実施嫌い群」(46人)、続いて「未実施嫌い群」(15人)、「実施嫌い群」(14人)となっている。ここで注目すべき点は、縦軸で考えると、学校支援ボランティア実施者ではおおよそ7人に1人の確率で子どもの時学校が嫌いだったと回答しているのに対し、未実施者では、おおよそ4人に1人の確率で子どもの時学校が嫌いだったと回答していることである。子どもの時学校生活が好きだったか、嫌いだったかの意識の違いが、将来的に学校支援ボランティアをおこなうか、おこなわないかの違いに影響を及ぼしていると言える結果であった。また、横軸で考えると「子ども時代学校が好き」と回答している人の3人に1人が学校支援ボランティアをおこなっていないのに対し、「子ども時代学校が嫌い」と回答している人では、2人に1人が学校支援ボランティアをおこなっていないという結果になった。

これらの結果を、割合で示しグラフ化したものが【グラフ 7-2-3】である。

実施群、未実施群の「子ども時代の学校生活の好き嫌い」を比較してみると、実施群では86.5%の人が「好きだった」と回答しているのに対し、未実施群では75.4%となり、実施群は未実施群よりも11.1ポイント高い結果になった。

【表 7-2-4】

母親・父親の子ども時代の学校生活に対する印象と学校支援ボランティア経験のクロス集計表

学校生活の印象 ボランティア経験	好き群	嫌い群	総計
実施	69	11	80人
未実施	25	12	37人
総計	94人	23人	117人

次に、【表 7-2-4】は、今までの結果を踏まえ、さらに対象を子に対する統柄の母親と父親に絞ってまとめたものである。祖母と祖父を対象から外した意図として、一つには、現在学校支援ボランティアの中心的な役割を担っているのが母親と父親であるという点である。二つ目に、子ども時代の学校生活に対する意識の正確さである。母親、父親の意識が正確かという点、必ずしもそう言いきれものではないが、少なくとも、祖母や祖父よりは、小学校時代から今までの時間が短いという点で、より正確な数値が導き出せると考えたからである。以上の点により、母親と父親だけで集計をまとめてみた。

【グラフ 7-2-5】は【表 7-2-4】を割合で示しグラフ化したものである。

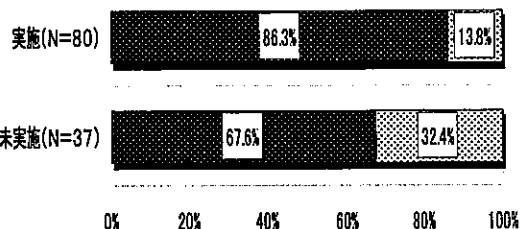
実施群、未実施群の「子ども時代の学校生活の好き嫌い」を比較してみると、実施群では86.3%の人が「好きだった」と回答しているのに対し、未実施群では67.6%となり、実施群は未実施群よりも18.7ポイント高い結果になった。この数値は、Pearsonのカイ2乗検定で漸近有意確率が0.018 (<0.05=有意水準)となり、統計上、確率的に偶然とは考えにくく、意味があると考えられる値を示した。つまり、『子ども時代学校生活が好きだった人ほど、将来、学校支援ボランティアとして活躍している』また、『子ども時代学校生活が好きではなかった人ほど、将来、学校支援ボランティアをおこなっていない』と言える可能性が高い値であった。しかし、祖母や祖父を含めた数値では0.07 (>0.05=有意水準)となり、有意と言うことができなかつたので、この間に対しては、今後、対象者および地域性を考慮しながら、サンプル数を増やし検証する必要があると思われる。

【グラフ 7-2-5】

【問9】子ども時代の学校生活は好きでしたか

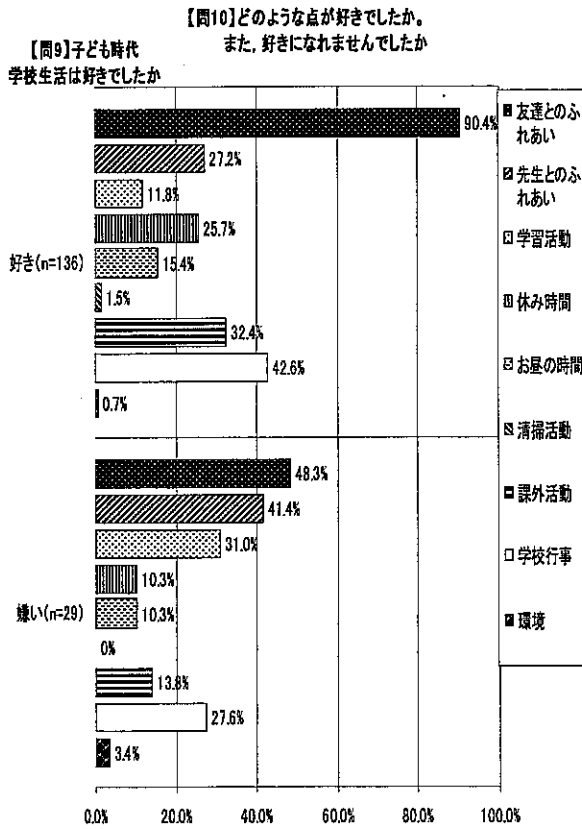
【問1】学校支援ボランティアをおこなったことがありますか

■好き □嫌い



(3) 回答者の子ども時代の学校生活に対する意識とその理由のクロス集計

【グラフ7-3-1】



【グラフ7-3-1】は、アンケート対象者すべてを対象に、【問9】「子ども時代学校生活は好きでしたか」と【問10】「子どもの時、学校生活のどのような点が好きでしたか。また、好きになれませんでしたか」（複数回答）を問うた結果をクロス集計し、グラフ化したものである。

まず、「好き群」から見ると、好きだった点として最も高い割合を示しているのが「友達とのふれあい」である。これは実に、回答者の9割以上（90.4%）が該当し、次に続く「運動会や学芸会、遠足などの学校行事」（42.6%）より47.8ポイントも上回っている。この結果より、「友達とのふれあい」が学校生活を好きといえるための最大の要因であると言えるだろう。「友達とのふれあい」にポイントこそ開けられたが、「運動会や学芸会、遠足などの学校行事」も約4割強の回答が得られたことから考えると、やはり大切な要因の一つということが言える。続いて、「課外活動」（32.4%）、「先生とのふれあい」（27.2%）、休み時間（25.7%）となっている。ここまでの、2割を超える回答があった項目である。

一方、「嫌い群」を見ていくと、「好き群」同様、最も高い割合を示したのは「友達とのふれあい」の48.3%であった。学校生活が好きといえるための最

大の要因であるばかりでなく、嫌いになる最大のきっかけにもなりうると言えるだろう。続いて「先生とのふれあい」（41.4%）が挙げられる。「好き群」では、4番目に高い割合であったが、ここでは2番目に高い割合を示し、「好き群」と比較すると14.2ポイント上回っている。学校生活において、教師の果たす役割は大きく、学校を好きにする以上に嫌いにさせてしまう要因として働いていることが分かる。3番目に高い割合を示したのは「学習活動」である。「好き群」では11.8%と低い割合であったが、ここでは、19.2ポイント上回り31.0%いる。学校生活を好きにさせる要因としては低い値を示していた「学習活動」ではあるが、嫌いにさせる要因としては、十分考えられることと言える。

「学校生活を好きにする要因」、「嫌いにさせる要因」それぞれが存在するのだということが結果から浮き彫りになった。

III章 まとめ

1節 調査結果の要約とまとめ

本調査は、保護者や祖父母の学校支援ボランティアへのかかわりや意識について調査することを通して、「学校支援ボランティアを核とした開かれた学校のあり方」を検討する。また、「小学校時代における学校生活の意識（ここでは、好きか嫌いか）の違いが、将来の学校への関わりに影響を及ぼす。」という仮説の妥当性を、学校支援ボランティアの現状から検証することを主目的として実施した。

(1) 回答者の基本的属性

本調査においては、基本的に属性を2項目に絞って捉えることとした。第一に子どもに対する続柄である。有効回答を得た170名のうち62人（36.5%）が母親であった。以下、多い順から示すと、父親が55人（32.4%）、祖母が29人（17.1%）、祖父が22人（12.9%）、叔母2人（1.2%）であった。

第二に、年齢についても確認した。占める割合が高い順から整理して示すと、30代が58人（34.1%）、次に40代の53人（31.2%）と続き、以下、60代が31人（18.2%）、70代が18人（10.6%）、50代が8人（4.7%）、20代が2人（1.2%）となった。つまり、この調査の中

心となったのは、30代から40代の母親と父親であるということが指摘できる。

(2) 学校支援ボランティア経験の有無とおこなった動機

学校支援ボランティア経験の有無を問うた結果では、「まったくおこなったことがない」と回答した人が38.2%、「1～2回おこなったことがある」と回答した人が34.1%、「何回もおこなったことがある」と回答した人が27.6%いる。つまり、保護者集団の約4割の人が学校支援ボランティアに関わりを持ったことがない人であり、その一方で、約6割の人が何らかの形で学校支援ボランティアの経験が有ると回答している。

また、学校支援ボランティア経験の有無を続柄別にみていくと、母親では69.3%の人が、父親においては、67.3%の人が学校支援ボランティアを経験している。特徴的なのは、父親の場合「何回もおこなったことがある」(40.0%)と回答している人が最も高いことである。「1～2回おこなったことがある」に高い数値を示した母親や祖父とは明らかに違う傾向を示した。これらのことから、現在、学校支援ボランティアの中心的な役割を果たしているのは母親と父親であるということが指摘できる。

次に、学校支援ボランティアをおこなった動機として最も多いのが「学校から依頼があり積極的に」と回答した人で43.7%。次いで多いのが「自分から率先して」と回答している人で30.1%である。この2つの「おこなおうとした動機・きっかけ」を合わせると約7割を占める。以下、「友人や知人に誘われて」(13.6%)、「学校から頼まれたので仕方なく」(10.7%)はそれぞれ約1割強に過ぎなかった。この結果から、学校支援ボランティアに取り組んでいる人の大部分は、積極的な動機で実践した人であるということが分かる。

子どもに対する続柄別に見ていくと、特徴的なのは、母親の半数近く(45.2%)は「自分から率先して」と回答していることである。また、祖父の6割強が「学校から依頼があり積極的に」と回答していることである。一方、父親の18.4%が「学校から頼まれたので仕方なく」と回答している。母親や祖父のように自発的な要素が強い動機で学校支援ボランティアをおこなってばかりいないということが分かる。

「学校支援ボランティアの経験回数」と「おこな

おうとした動機・きっかけ」のクロス集計の結果から、「何回もおこなったことがある」と回答した人の「おこなおうとした動機・きっかけ」で最も多いのが「自分から率先して」と回答した人で43.5%。次に多いのが、「学校から依頼があり積極的に」と回答した人で37.0%である。「1～2回おこなったことがある」と回答した人では「おこなおうとした動機・きっかけ」で最も多いのが「学校から依頼があり積極的に」と回答した人で49.1%。次に多いのが、「自分から率先して」と回答した人で19.3%である。

この結果から、学校支援ボランティアに「自分から率先して」取り組んだ人の半数近くは、何度も学校支援ボランティアとして学校に関わりを持っている人だということが分かる。また、「学校から依頼があり積極的に」と回答している人の多くは、学校支援ボランティアとして1ないし2回の取り組みで終わっているということが分かる。さらに言えば、「学校から頼まれたので仕方なく」と消極的な動機・きっかけで学校支援ボランティアをおこなった人は、1～2回の経験で終わってしまっているということが分かる。

(3) 学校支援ボランティア経験のない理由と今後の意向

学校支援ボランティアをおこなったことがない理由として2つの要素が挙げられる。1つは、「忙しくて時間がないから」(42.2%)、もう一つは、「学校支援ボランティアのことがよくわからないから」(31.2%)である。この2つの理由を合わせると、全体の7割強にあたる。「面倒だから」(1.5%)「関心がないから」(0%)等の理由で学校支援ボランティアをおこなっていないのではないことが分かる。

次に、学校支援ボランティアの今後の意向では、回答の割合が多かったものから順に挙げていくと、最も多かったのが「農園活動・花壇の整備・校庭の美化などの支援」と「登下校の安全への支援」でともに23.8%。続いて「クラブ・学校行事への支援」(15.9%)、「校外学習の引率などの支援」(14.3%)、「各教科・総合的な学習・道徳などの学習支援」(6.3%)、「読み聞かせ・図書の修繕など読書活動への支援」(4.8%)、「課外活動への支援」(4.8%)となっている。この回答割合の順番性は、学校・保護者・地域の特性にもよるが、知識・技能を要求されるほど割合が低くなっている。

続柄別に見ていくと、それぞれの属性ごとに特徴

的な傾向を見ることができる。母親では、「農園活動・花壇の整備・校庭の美化などの支援」(31.6%)、「校外学習の引率などの支援」(31.6%)に高い割合を示しているのに対し、父親では、「クラブ・学校行事への支援」(22.2%)、祖母と祖父では「登下校の安全への支援」に高い割合を示していた。前述で知識・技能の大切さを挙げたが、そればかりではなく、続柄の特性も活動分野を決める要因の一つとして考えられることが分かる。

(4) 学校支援ボランティアの活動分野

現在アンケート実施校でおこなわれている学校支援ボランティアの活動分野を見ていくと、回答割合の多かった主なものを挙げると、「クラブ活動・学校行事への支援」(43.7%)、「校外学習の引率などの支援」(38.8%)「農園活動・花壇の整備・校庭の美化などの支援」(37.9%)、「登下校の安全への支援」(37.9%)である。これら4つの分野は、4割前後の回答があり、現在おこなわれている学校支援ボランティア活動の中心と言える。「各教科・総合的な学習の時間・道徳などの学習支援」は、ある程度専門的な知識・技能が必要であると思われる分野であるため、活動に躊躇する傾向にあるものと思われる。

続柄別に特徴を見ていくと、母親では「校外学習の引率などの支援」(71.4%)、父親では、「クラブ活動・学校行事への支援」(60.5%)、祖母では「農園活動・花壇の整備・校庭の美化などの支援」(55.6%)と「登下校の安全への支援」(55.6%)、祖父では「登下校の安全への支援」(42.9%)になる。

これらの結果から、属性ごとに学校支援ボランティアで活動している分野が違うということが浮き彫りになった。

次に、「学校支援ボランティアをおこなおうとした動機・きっかけ」と「学校支援ボランティアの活動分野」のクロス集計から特徴的なことを挙げると、一つ目に「学校から依頼があり積極的に」と回答している人は「クラブ活動・学校行事への支援」(50.0%)と「農園活動・花壇の整備・校庭の美化などの支援」(50.0%)に偏りを見せているという点である。つまり、裏を返せば、学校からの依頼はこの2点に頻度が偏っていると言えるのである。二つ目に、「学校から頼まれたので仕方なく」もしくは、「友人や知人に誘われて」と回答している人の最も多い活動分野は「校外学習の引率などの支援」である。「学校から頼まれたので仕方なく」と回答した人

では48.4%、「友人や知人に誘われて」と回答した人では44.4%であった。このことから、推測の域ではあるが、学校から校外学習の児童引率の依頼があった場合、仕方なくおこなっている人は、一人でおこなうことなく、友人や知人に声を掛け一緒におこなっているという姿が見えてくる。

三つ目に、「自分から率先して」と回答している人の45.5%が「農園活動・花壇の整備・校庭の美化などの支援」をおこなっているということである。つまり、主体的な活動が実践できる場があるということは、学校支援ボランティアを受け入れる態勢もできているのではないかと思われる。学校の実情にもよるが、学校、学校支援ボランティア相互のニーズが一致してこそ活発な活動が展開できるものと考えられる。

(5) 学校支援ボランティア経験による自己の変容

学校支援ボランティアをおこなったことによる自己の変容として、6割以上の人が「自分の子(孫)だけでなく、他の子(孫)のことが分かるようになった」(69.9%)および、「学校や子どもたちのことが分かるようになった」(65.0%)と回答している。ここで特筆すべき点は、高い割合を示した2つの結果からも分かるように、学校支援ボランティアをおこなうことにより、学校理解や児童理解が進むという点である。このことから、学校支援ボランティアは「開かれた学校」の推進のためにも必要な存在であると言える。

次に、学校支援ボランティア経験回数と自己の変容の関係を見ていくと、「何回もある」と回答している人の実に87.0%が「学校や子どもたちのことが分かるようになった」と言っている。「1~2回ある」と回答している人は、同項目において47.4%で、比較すると39.6ポイントの差が開いている。学校に足を運んだ回数が多いほど、出会いと交流が生まれたり、子どもたちのことが分かるようになっていく傾向にあることが分かる。

さらに、学校支援ボランティアをおこなおうとした動機・きっかけと、自己の変容の関係を見ていくと、特徴的なものとして「友人や知人に誘われて」と回答している人の64.3%が「新しい仲間と出会ったり・交流が生まれたりした」を選択している。さらにおもしろいことに、「自分自身の成長につながった」も35.7%と高い割合を示していた。このことから、新しい仲間・新しい交流のひろがりには、自分自

身の成長の一部と考えているのではないかと推測できる。

声を掛け合う、または、声を掛け合えるような関係づくりは、学校支援ボランティアを展開する上で大切な一要素になるのではないかと考えられる。

(6) 学校支援ボランティアの今後の意向

学校支援ボランティア今後の活動分野の意向で言えることは、一度取り組んだことのある馴染みの分野を次回も希望するということである。各教科で実践した人は次回も各教科で、農園活動をおこなった人は次回も農園活動でということである。個人の範疇を超えることなく、できる範囲で、また、自分の得意なものを生かして取り組んでいるという実情が見えてくる。逆の視点から考えると、一度経験することにより、次回もその分野での活動が期待できるということである。「各教科・総合的な学習の時間・道徳などの学習支援」や「読み聞かせ・図書の修繕など読書活動への支援」等の活性化のヒントにもなりそうな結果が表れていた。

次に、学校支援ボランティアをおこなうにあたっての課題であるが、まず「教員とのコミュニケーションの場や手段」の必要性を感じている人が約半数(53.4%)いるということである。学校および教員にとって、受け入れるための時間の確保は難しいことかもしれないが、そう感じている人が半数いるということは、今後検討しなければならない最重要課題だといえる。「学校支援ボランティアコーディネーターの配置」および「手引き・事例集などの作成と発行」等も解決の糸口として有効な方策になるものと考えられる。

最後に、学校支援ボランティア経験の回数別にみていくと、「何回もある」と回答している人の63.8%が「教員とのコミュニケーションの場や手段」と言っているのに対し、「1～2回ある」と回答している人は、同項目において43.1%で、比較すると20.7ポイントの差が開いている。このことは、前述してきた「実施すればするほど児童理解・学校理解が深まる」とは対照的に、「実施すればするほど、教員とのコミュニケーションの場や話し合う時間が必要である」ということになる。今まで学校側にとって、何度も来ているから大丈夫だろうと思われがちだった人たちが、実は今まで以上に話し合いが必要だということに気づかされる結果となった。

(7) 回答者の子ども時代の学校生活に対する意識と学校支援ボランティア経験の有無との関係

ここでは、学校支援ボランティアを「1～2回おこなったことがある」、「何回もおこなったことがある」と回答した人を「実施群」、「まったくおこなったことがない」と回答した人を「未実施群」とグループ化し、また、「とても好きであった」および、「どちらかといえば好きであった」を「好き群」、「どちらかといえば好きではなかった」および、「好きではなかった」を「嫌い群」とグループ化し一括りの集団として捉え論を展開していくこととした。また、子どもに対する統柄の母親と父親に絞って集計し考察していった。

この結果、Pearsonのカイ2乗検定で漸近有意確率が0.018(<0.05 =有意水準)となり、統計上、確率的に偶然とは考えにくく、意味があると考えられる値を示した。つまり、『子ども時代学校生活が好きだった人ほど、将来、学校支援ボランティアとして活躍している』また、『子ども時代学校生活が好きではなかった人ほど、将来、学校支援ボランティアをおこなっていない』と言える可能性が高い値であった。しかし、祖母や祖父を含めた数値では0.07(>0.05 =有意水準)となり、有意とすることができなかったので、この問に対しては、今後、対象者および地域性を考慮しながら、サンプル数を増やし検証する必要があると思われる。

次に、「好き群」、「嫌い群」から見た過去の学校生活の意識(好きだった点・好きではなかった点)をクロス集計し、その結果について見ていく。好きだった点として最も高い割合を示しているのが「友達とのふれあい」である。これは実に、回答者の9割以上(90.4%)が該当している。この結果より、「友達とのふれあい」が学校生活を好きといえるための最大の要因であると言える。

一方、「嫌い群」を見ていくと、「好き群」同様、最も高い割合を示したのは「友達とのふれあい」(48.3%)であった。学校生活が好きといえるための最大の要因であるばかりでなく、嫌いになる最大のきっかけにもなりうると言えるのである。続いて「先生とのふれあい」(41.4%)、「学習活動」(31.0%)が挙げられる。この二つの項目が高い割合を示していることから、学校を好きにする以上に嫌いにさせてしまう要因として、教師の果たす役割の大きさが伺える。

(8) まとめ

本研究の「学校支援ボランティアを核とした開かれた学校のあり方」および、「小学校時代における学校生活の意識（ここでは、好きか嫌いか）の違いが、将来の学校への関わりに影響を及ぼす。」という仮説の妥当性は、アンケート調査の分析を通して、その一端を垣間見ることができた。

まず、「学校支援ボランティアを核とした開かれた学校のあり方」では、学校支援ボランティアをおこなった動機、活動分野、今後の意向等の分析により、明らかになったことがあった。

一つ目に、学校支援ボランティアをおこなうことにより、学校理解・児童理解が深まるという点である。学校が真に地域の核となり、地域と共に歩むことができるかは、学校が今以上に地域を理解し、地域を受け入れる姿勢を示していけるかが鍵となる。そうすることにより、情報、交流、しいては協働の扉が開くものと思われる。その扉を開く鍵の一つに学校支援ボランティアは重要な役割を果たすと言えるのである。

二つ目に、学校支援ボランティアをおこなうことにより、交流の輪がひろがるということである。このことは、学校のみならず、地域のネットワークづくりにも寄与するもので、地域の活性化の原動力になるものと考えられる。

次に、「小学校時代における学校生活の意識（ここでは、好きか嫌いか）の違いが、将来の学校への関わり（学校支援ボランティア）に影響を及ぼす。」という仮説の検証では、『子ども時代学校生活が好きだった人ほど、将来、学校支援ボランティアとして活躍している』ということが、Pearson のカイ2乗検定よりおおむね断定できるようになったことが、最大の成果と考えている。つまり、次代を担う子どもたちに、学校が好きだったという印象をもたせ、社会に巣立たせることが、学校支援ボランティアを活発にさせるためにも大切なことなのである。

最後に、本アンケートの結果から、学校、教師が今後果たすべき役割がおぼろげながら浮かび上がってきた。いずれにしろ、学校、教師が動かなければ、何も始まらないということである。「動くことにより、何かが始まる」そう信じたい。以上で本研究を終了する。

学校支援ボランティアへの参加の実態および意識に関する調査

アンケート調査にご協力をお願い
願書の様、皆様方におかれましては、ますますご多幸のことと存じます。さて私こと、平成19年10月から平成20年3月までの半年間、宇都宮大学生涯学習教育研究センターにおいて、「学校と家庭・地域の連携・協働」について研究を進めております。そこで、大変恐縮とは存じますが、今回の研究をまとめるにあたり、参考とさせていただきます。保護者の皆様ならびに祖父祖母の皆様にアンケートのご協力をお願いする次第です。本データは、宇都宮大学生涯学習教育研究センター専任教員（佐々木英和准教授）の指導のもと、統計的に処理いたします。また、本アンケートは、無記名で実施し、回答者の皆様に迷惑をかけることはございませんので、率直なご意見をお待ちください。ご多忙中お手数をかけまして申し訳ありませんが、調査をご理解の上、ご協力くださいますようお願いいたします。

平成20(2008)年 1月 矢板市立西小学校 教諭 手塚 孝一

【ご記入にあたって】
※ ご面倒をかけて申し訳ありませんが、本アンケートには、ご家族の皆様が、それぞれ別々の用紙にご回答ください。祖父祖母が回答されていないなど無理な場合は結構です。
※ アンケートのお答えは、それぞれの欄の番号に○をお付けください。
※ アンケートの実施期間は、平成20年1月30日(水)～2月5日(火)までの7日間で、ご回答いただいたアンケート用紙は、お手帳をおして、2月5日(火)までに、担任の先生にご提出くださいますようお願いいたします。

【この調査へのお問い合わせは、下記までお願いいたします】
宇都宮大学生涯学習教育研究センター 研究生 手塚 孝一
〒321-8505 宇都宮市橋本350 Tel: 028-649-5144 Fax: 028-649-5145

- ③ まずはじめに、あなた自身のことをお聞かせください。
A. あなたは以下のどれに該当しますか
① 母親 ② 父親 ③ 祖父 ④ 祖母 ⑤ その他()
B. あなたの現在の年齢は、以下のどれに該当しますか
① ~19歳 ② 20~29歳 ③ 30~39歳 ④ 40~49歳
⑤ 50~59歳 ⑥ 60~69歳 ⑦ 70歳以上

「学校支援ボランティア」とは？
学校教員の場で、ご本人の自発的な意思によっておこなわれているボランティア活動を指します。本校の場合は、「校外学習の送迎・引継ぎ」「放課後の児童クラブ活動への支援」「放課後の整理」「放課後の課外活動の指導」等、すべてではありません。PTA活動・PTA主催行事への参加や当番制の割り当て活動は含まれません。

- 【問1】 あなたは、これまで、学校支援ボランティアをおこなったことがありますか、もっとも近いと思われるものの番号1つに○をつけてください。
① まったくおこなったことはない
② 1~2回おこなったことがある
③ 何回も行ったことがある

- 【問1】で①と答えた方のみ、ご回答ください。
【問2】 学校支援ボランティアをおこなったことがない理由として、もっとも近いと思われるものの番号1つに○をつけてください。
① 忙しくて時間がないから
② 面倒だから
③ 関心がないから
④ 学校のことは、教員に任せるものだと考えているから
⑤ 自分にもできると思われないから
⑥ 学校支援ボランティアのことがよく分からないから
⑦ その他()
【問3】 今後、学校支援ボランティアをおこなうとしたら、どのような分野でおこなってみたいですか。以下の項目のうち、あてはまるものの番号すべてに○をつけてください。
① 各教科・総合的な学習の時間・道徳などの学習支援
② クラブ活動・学校行事への支援
③ 読み聞かせ・読書の推進など読書活動への支援
④ 読書活動・読書の推進・校庭の美化などの支援
⑤ 校外学習の引率などの支援(遠足・スキー・スケート教室等含む)
⑥ 登下校の安全への支援(除雪作業・巡回指導等含む)
⑦ 課外活動への支援
⑧ その他()
⑨ 特になし・おこなうつもりがない
4ページの【問9】にお読みください。

- ここからは、【問1】で②または③と答えた方のみ、ご回答ください。
【問4】 学校支援ボランティアをおこなうきっかけとして、もっとも近いと思われるものの番号1つに○をつけてください。
① 自分から率先して
② 友人や知人に誘われて
③ 学校から依頼があり積極的に
④ 学校から頼まれたので仕方なく
⑤ その他()

〈参考文献〉

本報告書を作成するにあたり、参考にした調査研究報告書は以下の通りである。

(1) 「町民の生涯学習に関する意識調査報告書」 発行日：平成18年3月 編集・発行：上三川町 上三川町教育委員会 上三川町生涯学習まちづくり推進本部 協力：宇都宮大学生涯学習教育研究センター 調査研究委員主査：佐々木英和 宇都宮大学生涯学習教育研究センター準教授

(2) 平成17年度「学校支援ボランティアに関する調査研究」報告書 発行日：平成18年3月 編集・発行：宇都宮大学生涯学習教育研究センター 栃木県総合教育センター生涯学習部 調査研究委員長：廣瀬隆人 宇都宮大学生涯学習教育研究センター教授

(3) 「学習活動・地域行事への参加の実態および意識に関する調査研究報告書」 発行日：平成18年9月 編集・発行：宇都宮大学生涯学習教育研究センター 研究生 吉田正道 指導教員：佐々木英和 宇都宮大学生涯学習教育研究センター準教授

(4) 「保護者集団による学校支援ボランティアの活動の実態および家庭教育の意識に関する調査研究報告書」 発行日：平成19年3月 編集・発行：宇都宮大学生涯学習教育研究センター 研究生 竹村耕生 指導教員：佐々木英和 宇都宮大学生涯学習教育研究センター準教授

【問5】 どのような学校支援ボランティアをおこなったことがありますか。以下の項目のうち、あてはまるものの番号すべてに○をつけてください。

- ① 各教科・総合的な学習の時間・道徳などの学習支援
- ② クラブ活動・学校行事への支援
- ③ 読み聞かせ・図書の読解など読書活動への支援
- ④ 運動活動・花壇の維持・校庭の美化などの支援
- ⑤ 校外学習の引率などの支援（遠足・スキー・スケート教室等含む）
- ⑥ 昼下校の安全への支援（録音作業・巡回指導等含む）
- ⑦ 課外活動への支援
- ⑧ その他（ ）

【問6】 学校支援ボランティアをおこなってみて、ご自身にはどのような影響や変化がありましたか。以下の項目のうち、あてはまるものの番号すべてに○をつけてください。

- ① 学校や子どもたちのことが、わかるようになった
- ② 自分の子（孫）のことが、よりわかるようになった
- ③ 自分の子（孫）だけでなく、他の子（孫）のことが、わかるようになった
- ④ 新しい仲間と出会ったり、交流が生まれたりした
- ⑤ 自分の気持ちに誇りあいができた
- ⑥ 自ら学ぶ意欲が向上した
- ⑦ もっと学校や子どもたちと関わりたいと思うようになった
- ⑧ 自分自身の成長につながった
- ⑨ その他（ ）

【問7】 今後も引き続き、学校支援ボランティアをおこなうとしたら、どのような点で充実させたいでしょうか。以下の項目のうち、あてはまるものの番号すべてに○をつけてください。

- ① 各教科・総合的な学習の時間・道徳などの学習支援
- ② クラブ活動・学校行事への支援
- ③ 読み聞かせ・図書の読解など読書活動への支援
- ④ 運動活動・花壇の維持・校庭の美化などの支援
- ⑤ 校外学習の引率などの支援（遠足・スキー・スケート教室等含む）
- ⑥ 昼下校の安全への支援（録音作業・巡回指導等含む）
- ⑦ 課外活動への支援
- ⑧ その他（ ）

【問8】 今後も引き続き、学校支援ボランティアをおこなうとしたら、どのような点を充実させたいでしょうか。以下の項目のうち、あてはまるものの番号すべてに○をつけてください。

- ① ボランティア室や掲示板等の環境整備
- ② コーディネーターの配置
- ③ 交通費、材料費等の費用負担
- ④ 自身を高めるための研修会の実施
- ⑤ 教員とのコミュニケーションの場や手段
- ⑥ 教員と、事務員などの作成と発行
- ⑦ 学校側の受け入れ態勢および連絡
- ⑧ 学校支援ボランティアとしての経験および技術
- ⑨ その他（ ）

ここからは再び、全員の方がお答えください。

【問9】 あなたは、子どもの時（小学校時代を指定してください）学校生活は好きでしたか。以下の項目のうちもっとも近いと思われるものの番号1つに○をつけてください。

- ① とても好きであった
- ② どちらかといえば好きであった
- ③ どちらかといえば好きではなかった
- ④ 好きではなかった
- ⑤ わからない、忘れてしまった

-【問11】へ

【問10】 前の質問【問9】で①、②、③、④と答えた方のみご回答ください。あなたは、子どもの時（小学校時代を指定してください）学校生活のどのような点が好きでしたか。また、好きになれませんでしたか。以下の項目のうち特にそう思われるものの番号から3つ以内で○をつけてください。

- ① 友達とのふれあい
- ② 先生とのふれあい
- ③ 学習活動
- ④ 休み時間
- ⑤ お昼の時間（給食の時間）
- ⑥ 清掃活動（単に作業含む）
- ⑦ 課外活動（放課後）
- ⑧ 運動会や学芸会、遠足などの学校行事
- ⑨ 施設・設備などの環境
- ⑩ その他（ ）

【問11】 学校・家庭・地域が連携し、教育的効果を高めるために、どのようなことが大切か、考えをお書きください。

* 以上でアンケートは終了です。お忙しい中、多くの皆様方にご協力をいただきまして誠にありがとうございました。

おわりに

このたび、2007（平成19）年度の内地留学の機会をいただき、大変整った環境・設備、そして数多い社会教育関係の文献・資料のある宇都宮大学生涯学習教育研究センターで半年にわたる研究活動に取り組んでまいりました。

本研究を進めるにあたり、指導教官の佐々木英和先生には、本調査研究の実施にあたり、アンケート調査票の枠組みから調査分析の手法、調査結果の整理の仕方について、非常に多くの具体的なお教示をいただきました。また、学部の授業・ゼミ、公開講座等に参加させていただき、先生の物事を捉える視点、言葉を大切に扱う姿勢から多くのことを学ばせていただきました。あらためて御礼申し上げます。

同センター長の塚本純先生には、常にお気遣いと温かな励まし激励の言葉をかけていただきました。充実した研究ができるようにとの先生の御配慮に対し御礼申し上げます。

同センター教授の廣瀬隆人先生には、多くの学びの機会をいただきました。学部の授業、公開講座等に参加させていただきました。先生の情熱あふれる指導からエネルギーをいただいたばかりでなく、内地留学ならではの貴重な体験をすることができました。大変感謝いたしております。

栃木県総合教育センター生涯学習部長の津浦幸夫先生をはじめ関係の先生方には、生涯学習関連の研究などで大変お世話になりました。深く感謝申し上げます。

同センター研究生の手塚康彦先生、安武裕一先生には、後期半年という短い期間ではありましたが、学部の授業、公開講座、学外研修、そして、研究生生活全般において大変お世話になりました。お二人がいてくださったことで公私ともに充実した日々を送ることができました。本研究を進める上では、適切な助言をその都度いただきました。また、校正作業の際には、細かな点まで指摘していただき大変助かりました。本当にありがとうございました。

この1年間にお世話になった同センター関係者の皆様、関係学部生・大学院生の皆さん、そして、研究に際し御助言をいただきました多くの自治体関係者の皆様の御厚情に深く感謝申し上げます。最後になりましたが、貴重な研究の機会を与えてくださいました栃木県教育委員会、塩谷教育事務所、

矢板市教育委員会、ならびに、内地留学期間中温かくご支援くださいました矢板市立西小学校長高垣由幸先生をはじめ、同校の職員の皆様方に厚く御礼申し上げます。さらに、忙しい中時間をさいてアンケート調査に御協力くださいました保護者の皆様にも謹んで感謝の意を表します。

2008（平成20）年3月